
古代の死神

天孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古代の死神

【Nコード】

N1099S

【作者名】

天孤

【あらすじ】

気が付けば草原に寝ていた男、獅子堂ししどう 雄希まひき。

ふと体を見てみれば、何故か自分は死覇装を着ていた。うえ？ な、何で！？ 一体、全体どうなってんだーっ！！！そんな感じで、獅子堂 雄希の物語——……… 始まります。

第0話 初代死神（前書き）

今回はBLEACHです！

なぜか終わってないのに、次の小説を書いてしまう。

まあ同じのばかり書いてると、すこしテンションが下がってくるしね！

しゃーないと思うね、作者的には…。

まあ駄文ですが、見てってください。

第0話 初代死神

——ふと、小鳥のさえずりと暖かな風に髪が揺れ、意識が目覚める。

寝ぼけているのか、ぼやくとしながら雲一つない青空を見上げる。

そこで気付く。部屋で寝ていたはずなのに、青空が見えることに…。

……ん？ 青空？ なんで青空があるんだ？ 疑問を浮かべながらも、不足している情報を得るため、腕に力をいれ上半身を起こした。

体を起こし周りを見ると、そこには青々と茂った草原が広がっていた。

——…うん！ 意味わからん！

正直、どうしようか頭に浮かばない。だって部屋で寝てて、起きたら草原って……俺にどうしろと？

俺は頭を右手で掻きながら、深い溜め息をついた。

とにかく立ち上がろうと、地面に左手をつこうとすると、ガチャと何かを触ったような音と感触があり、手をついた場所を見ると、そこには何故か“刀”があった。

——わーい！ 銃刀法違反！ てへっ♪

——orz……………どうしよう。

あまりの衝撃に、四つん這いになって落ち込んでしまった。

まさか刀があるとは思うまい。日本男児として憧れはあるが、この時代、さすがに刀を持つとは思いません。

そういえば先程から疑問に思っていたんだが、俺、なんで死覇装着てんの？ マジ意味わかんねえ。もうダメポ……。

俺は他に情報はないか、立ち上がって周りを見渡してみた。
周りには草原と木々があり、遠くのほうには山々が連なっていた。

こんな場所、日本にあつたのか？俺は疑問に思いながらも、とりあえず落ちていた刀を左腰に差して、草原を歩き出す。

まずは村か町、人の集まっているところを探してみよう。
そうすれば家に帰れるかもしれない。

……にしても、なんでこんな所に俺がいるのかが、わからん。別に自分の家は金持ちでもないから、誘拐という訳ではないだろう。友達 of イタズラにしては大掛かり過ぎるし、流石にこんな変なことはない。……もしかして、危ない宗教とか、なんか事件に巻き込まれたか？でもこんな所に置いていかないだろうし……はあ、とりあえず人を見つけないと。

俺が周りを注意しながら歩いていると、少し遠くのほうで煙が上がっているのが見えた。

もしかして人がいるのかもしれない。俺は少し希望が見え、その煙の上がっているところを目指し、走り出した。

しばらく走り、煙の発生元の見えるところまで来ると、息を整えながらそこを見てみた。

「……………うそ……………だろ……………」

そこのは獣皮を体につけ、石で出来た槍・弓矢を手に持つ人々がいた。

中心に広場があり、その周りに竪穴住居が立ち並び集落を作っていた。

集落の周りには田んぼがあり、金色の絨毯が広がっている。他には畑などもあり、貝塚など見られる。

まさか映画の収録と言えない事もないが、それはないだろう。

……………くそ！ さすがに時間跳躍したとは思わなかった。異世界にきてしまったのかと、頭の隅っこで考えていたが、これは考えていなかった。

しかし、その問題を置いとくにしてもどうするか……………。

言葉は伝わらないだろうし、見た感じ縄文時代か、弥生時代だろうから、それ以前に言葉があるかもわからない。

正直、自分の事もよくわからん。

なぜ自分が死覇装をきているのか？ この時代になぜ刀があるのか？ 色々わからん事が多いが、少しずつ解いていくしかないな。

……まあ予想ではあるが、たぶん俺は——…死神、になったかもな。

それは何故か？　だってこの姿を見て、そう思わないほうがおかしいだろ？　それに昨日寝る前にBLEACHの漫画見てたんだよね。その時、漫画の世界行きてえー、とか思ったわけよ。絶対その所為だよな？　でも普通こんな事になるとか、思わないしね。俺にどうしろと……？

うーん。死神だったとしても、よくわかんないしね。死神ってご飯いるのかな？　おしっことかすんの？　マジよくわかんねええわとにかく色々試していくしかねえな。

……そういえばいま思ったんだけどよ、俺……元柳斎より年上じゃね？

あの最強爺さんより先輩とか、めっちゃカッコイイじゃん！

「雄希殿」とか言われそうじゃね？　あ、そういえば俺の名前言ってなかったわ。

俺の名前、獅子堂しじゅうどう雄希おんきだから。よろしく。

え？　遅すぎるって？　だってパニクってたし、しゃーないじゃん。

まあとりあえず、俺が死神ということが前提で頑張っていきます

か！

よし！ まずは靈力を自由自在に操れるようにしないと。

瞬歩とか鬼道とか色々やってみたいし、最終的には始解・卅解と
かできたらいいな。てか俺って何処まで靈圧あんだろ。一護ぐらい、
いやそれ以上ぐらいあつて欲しいな。

体も鍛えとこう。やっぱ剣術とかやつとかないと、戦えないし。
刀なくても、戦えるぐらいにしとかないとな。

よし、どうせなら最強めざそうかな！！ 男としては！！

— それから3500年

俺は体を鍛え、自らの剣術を磨き、死神としての能力を上げていく。

次回からはその3500年の日々を簡単に伝えていきたいと思う。

じゃあ、またな!!

続
く

第0話 初代死神（後書き）

まあ結構、昔になってしまいましたが、こういつのって面白いと思うんですよね。

これからも頑張るんで、ご愛読お願いします。

誤字・感想ありましたらお願いします。

第0・5話 キャラクター紹介（前書き）

ドンドン追加していくと思います。

ネタバレ注意

11・4・3 改稿

斬魄刀解放後の姿形を変更

敵を作らない。

身内には優しいが、敵には容赦がない。自分に楯突く事が出来なくなるまで、潰しきる。

・斬魄刀

始解《雷獅丸》

雷系（自称）最強の斬魄刀。解放後は常に刀身に雷を纏っている。

斬魄刀解放と共に柄尻に長い鎖が現れ、先に金属製の輪が付

き、溢れだす霊圧が触れたもの全てを痺れさす雷と雷の獅子を創り出す。

斬魄刀そのものにも、触れたものに痺れさす能力が付加する。また基本能力の一つとして天候を支配する「天相從臨」があり、

その能力により四方三里（半径約12km）に及ぶ広範囲の天候に影響を与える。

日番谷冬獅郎の《氷輪丸》と同じ能力であるが、雄希のほうが上手く操ることができる。

解号は「猛る獅子の王となれ『雷獅丸』」（たけるししのおうとなれ『しし』）」

・本体

雷を体に纏った獅子。よく夢の中に出てきたりする。見た目は

第1話 俺の修行日記（前書き）

（1142 改稿）

雷系最強↓雷系（自称）最強

第1話 俺の修行日記

side 雄希

という訳で修行することにした。
といつても何をするか、まだ何も決まっていないうし、何をすれば良いのかもわからん。

兎に角走って体力とかつけようかな……。後は筋トレとか、瞑想とかも靈力操るのに良さそうだな。

まあ最初は手探りでやっついていこうと思う。じゃあ、走って来るわ。一応木の実とか取っておこ。

5時間後

俺はランニングの後、筋トレ、素振り、瞑想など色々やってみた。効果がすぐに現れるわけではないので、これからも頑張っていこうと思った。

その後やはり死神でもお腹が空いた。……死神って現世の食べ物食えんのかな。

とりあえず拾ってきた胡桃とか食べてみた。……しぶつ！

—— 50年後

あれから50年。俺はランニングや、瞑想など基本的な事をやり続けた。

正直1年たった時ぐらいから、結構効果は現れていた。それを50年もやってたら、中々強くなったと思う。まあ比較対照する人がいないから、どうかはわからないけどね。

そういえばこの前、始めてホロウ虚を見た。

見た目は魚っぽい感じだった。熊とか襲ってたから、熊狩るついでに襲ってみた。

あんまり強くなかったから、普通に倒せた。多分だが成仏できたと思う。

その時思ってたんだが、いま霊界・尸魂界ってあんのかなって思う。

でもあそこないと幽霊の行く場所ないし、あるんだと思う。また行けるようになったら、一度行ってみようと思う。地獄蝶いないと断界にいつちゃうから、気を付けないと。

俺の霊圧は高いほうなのか、霊絡が見えた。

霊絡は大気中の霊気を視覚化したもので、上位の死神のみ見たり触れたりすることが出来るものだ。

なので霊圧は高いほうだと思う。残念ながら赤い霊絡は無かった。ちなみに赤は死神にしかない。

でも未だに始解は出来ない。一護とか早すぎだと思う。

まあ俺があんまり積極的ではないからだと思うが。もう直ぐ始解しそうな気がするので、気楽に頑張っていこうと思う。というか早く鬼道をしたい。

—— 300年後

お久しぶり。雄希です。

いま俺は、斬魄刀と対話している。200年程前に始解した。

斬魄刀の名前は『雷獅丸』。本体が言うには雷系（自称）最強の斬魄刀らしい。

本体の見た目はライオンなんだが、何故か関西弁で喋る。あの厳つさで、関西弁は反則だと思う。始めて聞いた時は、思わず笑ってしまった。

『あんさん、あんさん。如何したんでつか？』

「なんでもねえよ、雷獅丸」

『そうなんか？まあそういうなら、ええけど……』

つか、こいつ結構喋るんで喧しい。正直ウザイ。

「にしても、早く科学力発達しねえかな。何もねえから暇だわ……」

『カガクというと、キカイとかいったもんやったっけ？』

「ああ。そんなもんだ」

『そんなもんこの時代にないんやろ？ 前にあと6000年はできねえとかいっとったやないか』

んな事言われても暇なもんは暇なんだよ。折ってやろーかこの野郎。

「ああ、とにかく早く時間たつてほしい」

『そんなことグダグダいつとらんと、修行や修行！』

「…わかってるよ」

俺は胡座を解くと、雷獅丸を片手に立ち上がる。

……よし、今日は能力の修行でもやるか。

俺は斬魄刀を鞘から抜き、両手に持ち正眼に構えると、斬魄刀を解放する。

「猛る獅子の王となれ『雷獅丸』！」

斬魄刀解放と共に柄尻に長い鎖が現れ、先に金属製の輪が付き、刀身に雷を纏いだす。

雷獅丸は氷輪丸同様、天候を操ることができる。雷は雲から落ちるからな、当然だ。

俺は雲を操り、雷雲を作り出すと、早速技を繰り出した。

「『獅子雷雷』！！」

技の発動とともに、地面に大量の雷が放たれる。

斬魄刀からでも雷は出せるが、雲からのほうが出しやすい。

天候を操ってるだけだし、霊力の消費を抑えることができる。

短期決戦なら斬魄刀から放った方がいいが、長期決戦なら雷雲の方がいい。

敵は雷雲も注意しとかないといけないからな。倒しやすくなる。

その後幾つかの技を試した後、斬魄刀を元に戻し、夕食を食べた後その日を終えた。

—— 2000年後

前より2000年、この世界に来てから2350年ほど経った。
大分時代も進んだ。といってもまだ縄文時代。あと1200年ほど経てば、弥生に入るだろう。

正直することがない。大体の修行は終わってるし、後は極めるだけだ。

鬼道も白打も歩法も殆ど習得済みだ。破道や縛道の九十番代の詠唱破棄だってできる。

最近では隠密歩法・四楓の参『空蟬』（うつせみ）とか、瞬間じふとくを開発している。

この前瞬間をしてみたら、両肩と背の布が弾けて無くなってしまった。思わず叫んだ。

それ以外には義骸などの道具も作ったりしている。今はあんまり出来が良くないけど、徐々にうまくなってきた。最終的には天賜兵装んしへいそうや、天踏てんとうけん、転神体てんしんたいとかも作ってみたい。ちなみに最後の三つは、尸魂界に伝わる「天から授かりし宝具」と称される貴重な道具だったり、四楓院家に伝わる、尸魂界にも2つとない秘宝だったり、隠密機動の最重要特殊霊具の一つである人形だったりする。

まさか俺が作ったとかだったら面白いじゃん。

作成者 俺（笑）みたいな。いいね、やってみよう。

ただ地獄蝶がいないので困った。

断界とか行きたくねえし、普通に。拘突とかに追われたら、嫌だしね。

といっても元柳斎に会いたいから、無理やりでも行くけどね。

若かりし元柳斎とかどんなだろ……ハンサムとか？ やべえWWW

早く過ぎてほしいわ、時間。1000年ほど。

——1000年後

という事で1000年経ちました。

すでにこの世界に来てから、3350年。

そろそろ尸魂界に行く準備をしようと思う。

まずは穿界門を作って、その後断界を固定しないとな。

後は早く通り抜けるだけだ。まあ一護たちでも通り抜けるんだし、いけるだろ。

あとついでに持つてる道具を持っていけるように、何か四次元ポケット的なものでも作らないと……いろいろ作りすぎたし。正直家に入らなくなってきた。

まあとりあえず研究室に引きこもるし、次会う時まで、アディオス……！！

続く

第1話 俺の修行日記（後書き）

今回は尸魂界に行くまでの、物語でした。

次回は尸魂界に行つてからのお話。

楽しみに!!

第2話 尸魂界

side 雄希

あれより150年。この世界に来て3500年過ぎた。

穿界門は結構早めに出来たんだが、少し四次元ポケット的な道具を作るのに時間がかかってしまった。

そろそろ行かないと、若かりし元柳斎が見れなくなるので、今から行くと思う。

「じゃそろそろ行きますか！」

俺は穿界門を原作の浦原みたいに、発動させると中に飛び込んだ……。

.....

.....

.....

.....

...

「うわぁ.....キモッ...」

想像してたより、断界の様子が気持ち悪かったので、思わず唸ってしまった。

拘流「くこうりゅう」がドロドロして、徐々にこちらに迫ってきている。

「.....走るか」

俺は拘流から逃れるため、出口を目指して走り出した。

断界は外界よりも濃密な時間軸が働いているその為、外界との時間差は2000倍であるので、固定している間に外に出ないと、外界に出た途端に体が付いていけずに死んでしまう。

ここで死んだら元もこうも無い。原作メンバーも見えてないし。

外界と尸魂界を繋ぎ止められる時間は、4分。それまでにできないと断界に閉じ込められる。

それだけは勘弁である。こんなトコにずっといれる自信はない。

数分ほど走りつづけていると、数十m先に出口が見えた。

俺は最後の距離を猛ダッシュし、すぐに距離を詰めた。

「よし！これで出られ――」

俺は光り輝く出口を越え、尸魂界の世界へと足を踏み入れた。

「……？」

地上より遙か上空に固定されていた出口から……。

[illegible]

まさかこんなに上空に出口が固定されてるとは思わず、パニックでそのまま落ちていった。

「は、はやく靈力で足場作らないと……」

俺は足場を作るため、足の裏に靈力を溜め始めた。

溜め始めると直ぐに俺の体は空中にとどまり、目下には尸魂界の様子が見える。

現在の尸魂界は外界よりは少し発達しているかなと思うぐらいだった。

時代的には古墳時代後期ぐらいだと思う。建物は竪穴住居ではなく、木で出来た、田舎にありそうな家が集落のように集まり、村があちこちに出来ている。

まだちゃんと整理されて、建っているのではなく結構疎らに建てられていた。

人もあちこちに見られる。刀を持っている悪人面の人間もいる。まだ地区は別れていないのか、悪人が一纏めにされていないようだ。

流魂街っぱいのは既に出来ているが、瀟靈廷らしきところはまだ見えない。

ただ靈力が高い人間はいるので、別に死神の仕事をするような人はいるらしい。

多分まだ組織化されていないんだろう。靈圧を探ると、あちこち

に存在しているのがわかる。

それを若き元柳斎が纏めていくんだろう。

ちなみに俺は霊圧を極限に下げているので、ばれる心配はない。
というかこの時代の死神モドキが霊圧を探れるのかわからない。

とりあえず地上に降りて、流魂街（仮）の様子とか、死神モドキ
を見てみたい。

俺は足場を階段状にして、遙か上空から地上へとゆっくり降りて
いった。

「まあ……色々、面倒な事が多いな……はあ」

流魂街を見た感じ、けっこう酷かった。

霊力を利用して人を襲ったり、食べ物がある店を襲ったりと色々問題が浮上した。

基本的に腹は減らないらしいが「霊力の素養を持つ者」は霊力を使うと腹が減るため、

盗みを働く者がいたり、人を襲ったりと色々大変だった。

別に霊力を使わないのなら腹は減らないはずなんだが、やはり戦闘狂みたいな奴が霊力を使って人を襲ったり、それに対応する人が霊力を使ったりと、お腹が減ってしまうらしい。

既に斬魄刀はあるらしく、結構半端ない戦闘があったりした。

時々始解してる奴とかいて、被害が大きい戦闘もあった。流石に卍解はなかったが。

炎出したり、氷出したり、風出したりと色々能力を使っていたりしていた。

正直被害が大きくなるので、少しO H A N A S Iしといた。後々護廷十三隊とかいろいろ作る予定なので、俺の弟子にしといた。

人数は4人。男3人に、女1人。みんな若く、戦っていたのは若気の至りらしい。

皆霊力が高かったのだが、特に一人高い奴がいたので名前を聞いてみたところ、なんと山本元柳斎重國というらしい。まさか若き元柳斎がヤンチャボーイだとは思わなかった。

他も朽木（男）に志波（女）、後は聞いたことの無い奴だった。多分コイツらが貴族になって、これから死神たちを纏めていくんだろう。

あと四楓院と、もう一つあるはずだから、また見つけ出さないと。な。

というか話を聞いたところ、朽木家や、志波家などの家は元々この辺を治める貴族だったらしい。

まあ貴族というより、地主っぽい感じらしいが。その辺がどんどん成り上がって五大貴族になったりしたんだらうと俺は思う。

兎に角こいつ等は、これからドンドン扱いていかないとな……クク。

[illegible]

さて、元柳斎どもを見つけてから、早100年。

今はあいつ等を修行させたり、人を纏め上げるための能力を高めたり、色々扱っている。

元柳斎はやはり人一倍才能があり、ドンドン強くなっている。他の奴らも元柳斎に遅れるも、徐々に力をつけていっている。

あとは、霊力が高い奴らを集めたり、流魂街の整備をしたり、霊力が強い奴らを貴族として鍛えさしたりと、いろいろやってきた。

特に一番の出来事は、王族に会いに行こう！ ということで、王鍵を作ろうと外界に行つて、重霊地を探つてみたところ、現代での滋賀県の中心部だった。この時代の人間は一箇所に集まらず、いたるところに集落を作っているのです、無くなってしまう土地の範囲が

広まってしまった。自分的には人間を消すのは余り気乗りしなかったが、王鍵を作らないと何も始まらないので諦めることにした。

そういえば後から気づいたんだが、滋賀の琵琶湖がこれが原因で出来たらしい。

「それで元柳斎よ。今から王族に会いに行こうぜ！」

「いやいや！ 師匠！ なに言ってるんですか！」

「いや……何って……王族？」

「王族って普通会えないでしょ！ 私愚民ですから！ ええ！」

「まあまあ。早速逝こうじゃないか！（ズルズル）」

「ギャ——っ！！！！ 文字が違います——！！！！」

俺は未だに躊躇う元柳斎の首根っこを掴むと、ズルズル引っ張っていく。

それを見ていた朽木、志波、その他ほかは、元柳斎の扱いを憐れんだという。

「「「（……………頑張って）「「「

……………

……………

……………

……………

…

結局王鍵を使って王族を見に異次元に行ったんだが、そこには力の塊があるだけだった。

といってもその力の塊は余りにも巨大で、危険な物だったので元柳斎と俺の秘密となった。

多分王族として扱って、この力の塊を封印、警護していたんだろう。これが虚や、野望をもつ死神に渡れば世界が破滅することにな

その後、元柳斎どもを400年ほど鍛えまくって、独立させた。
元柳斎はすでに見た目爺さん。朽木家、志波家などは何代か代替わりもしている。

え？ 俺？ まだ見た目20代ですが何か？ 元柳斎は――――
r zみたいな感じだったよ。

修行の間の400年間、尸魂界の中央に位置する貴族や死神たちの居住区を瀨霊廷とし、中央四十六室、護廷十三隊を設立。

その後、隠密機動、鬼道衆などの部隊をつくり、零番隊は王族特務として霊王、というか力の塊を護衛させた。

朽木、志波、新たに四楓院家ともう二つの貴族を加え、五大貴族として上流貴族を名乗らせた。

他にも上流貴族に霞大路家、京楽家、下級貴族に浮竹家、蜂家、吉良家を加えた。他にもいるけど、聞いてもわからないから、その辺はほっといてくれ。

そして、元柳斎を院長にして、死神統学院を設立。

若く力のある、死神候補生達を鍛えさせることにした。

勿論貴族も入れさせるし、流魂街からも力のある奴は入れさせた。

元柳斎によると、力を持つ奴らはいるが、まだまだ、とのこと。
そりゃあ元柳斎からみれば、全員まだまだだろうな。徐々に力をつけていくしかあるまい。

あと他にあるといえば、候補生達を現世に連れて行って、虚を退治させたり、幽霊を魂葬させたり、いろいろと鍛えさしている。

こつちに来てから見つけた地獄蝶も少しずつ増えていつている。言う事を聞かなかったりする事もあるらしいが、そこは試行錯誤させるしかあるまい。

そういえば護廷十三隊の隊長には、俺が鍛えた中で強い奴らを当てている。

勿論元柳斎は一番隊。二番隊には四楓院、六番隊には朽木家の者を、八番隊に京楽家、十三番隊には浮竹家を入れてみた。他の貴族は適当に入れている。

四楓院家と蜂家は隠密機動も担っている。吉良家はどこか適当に入っているだろう。霞大路家は別に何処にも入っていない。

こんな感じで時は過ぎていく。

続く

第3話 出会いと絶望（前書き）

斬魄刀解放後の姿形を変更

第3話 出会いと絶望

side 雄希

現在は現世で言う平安時代。西暦950年頃。
最も現世の人々が霊力をもっている時代であり、最も虚が活発だった時代である。

今の重霊地は京都。幽霊が多く、悪霊も存在しているので京都には陰陽師や、巫女など色々な霊能力者が存在している。本当かはどうかわからないが、幽霊が見えるのは間違いないだろう。

いま京都に行くと、死神を見て挨拶をする人々もいるらしい。俺は行っていないので知らない。

さて前回より、1000年ほど時間が進んだわけだが、特に目立つた出来事はない。

まあ朽木家の17代目の子供が数日前に生まれたとか、やっと流魂街と瀟靈廷の間の壁を作ることが出来たとか、特に面白みのないことなら沢山あった。

正直何代目の子供が生まれたと言われても、そういうのは今まで何回も聞いているので飽きる。

どうせなら旅禍が侵入してきたとか、特別な虚が生まれたとか面白い情報を持ってきてほしい。

ほら、やっぱり、こう長く生きてるとやる事がなくなってくるしね。早く原作メンバーに会いたいよ。だって今まで会えた原作メンバーって、元柳斎だけだぜ？ 爺さんに何を期待すればいいんだよ……。といっても俺のほうが年上なんだけどね。

うん。なんか暇でも潰せることとかないかな……。。

「獅子堂殿」

「ん？」

俺に話し掛けてきた声に覚えがあらながらも、声のするほうを振り返ってみた。

声のするほうを見ると、そこには斬魄刀の封印状態である杖をつきながら 長い白髭を左手で摩る元柳斎の姿があった。頭などには俺の修行によりついた傷がついている。いまは隠れて見えないが、体にはもっと多くの刀傷があるハズである。

昔は師匠、師匠とうるさかったが、爺さんに師匠といわれても、嬉しくも何ともないので名前を呼ばせることにした。でも元柳斎が

名前を呼ぶのは躊躇っていたので、最終的に苗字を呼ぶことになった。

「なんだ。元柳斎か。どうした？」

「いえ。少し知らせたいことが…」

「知らせたいこと？」

「とりあえず場所を移動しましょう」

「わかった」

「というか敬語で喋るな。気持ち悪い。」

.....

.....

.....

.....

「新しい虚？」

ここは一番隊隊舎、隊首室。
副隊長には退室してもらい、周辺の人払いは済ましてある。

「そうじゃ。どうやらギリアン程大きくはないようじゃが、通常の虚より大きく、しかも多くのギリアンをまとめていたということですね」

ふむ………
アジューカス 中級大虚か？

それと元柳斎の言葉遣いは普通にしてもらった。

少し敬語になってしまいうようだが、そこは気にしない。

「被害は？」

「どうやら現世の霊力を持つ人間は大勢やられておりますわい。
京都に派遣されていた死神も、命からがら尸魂界へと帰ってきたようですな」

「隊長達は派遣するのか？ そちら辺はどうなっている」

「問題はそこなんじゃ。現在隊長格は他の任務に当たっておりますゆえ、手が離せない状況なのじゃ」

「そこで俺か……」

「はい。どうかお願いします」

まったく隊長格皆が手が離せないとか、どんな状況だよ。

「まあ直ぐ準備して行ってくるわ」

は引っかかっていない。

つか、幽霊多いな、京都。^{プラス}整は勿論、^{デミ・ホロウ}半虚も結構いる。

まあこの時代死人はよくいるし、恨みをもつ人間も多いからな。
しゃーないと思う。

俺はもっとよく調べるために、平安京へと降りていった。

.....

.....

.....

.....

——これで成仏できる……（ホワーン）

「これで24体目つと……」

俺は平安京の中を歩きながら、整・半虚の幽霊を魂葬していた。
というか歩いていると、自然と目に付くほどに幽霊がいる。正直
すこしウザイ。

動物の幽霊は余りいないが、バカップルみたいな幽霊とかいるし、
時々妖怪みたいな奴もいる。

俺は呪われたくないので、妖怪モドキは出た瞬間、斬殺している。
サーチ・アンド・デストロイッ！！

「つーか、アジューカス（仮）でね……」

まったく出ない。いや、出ない方がいいのだが、俺的には出てく
れないと瀟々たるに帰れないので、さっさと出てくれた方がいい。本
音言つと、ちよっぴりダルくなってきた。

「………そういえば滅却師がいるんだよな。この時代もあのマント
してんのかな？」

してたら笑うな、マジで……。あのマントは恥ずい。

「あらあら。こりゃあ大惨事だな……」

俺が霊圧のする場所に到着すると、そこには魂を吸われた人間の亡骸が何体もあり、

現世の霊能力者が戦闘したのだろうか、炎で焼かれた木々や、抉れた地面が目立った。

現在も戦闘中なのか、少し離れたところで爆発音がしている。

虚の方は当然だが、戦っている人間も相当な霊圧を放っている。

正直隊長格にも匹敵するであろうと思われる、人外染みた霊圧だ。

俺はその人外と合流する為、足を急がせた。

……

俺が現場につくと、そこには陰陽師らしき人間が札を使ったりして、巨大な虚と戦っていた。

よく見ると陰陽師もよく戦っているが、やはり虚のほうが圧倒しているようで、陰陽師の体に傷が増えていつている。

その陰陽師は俺に気づいたのか、ふとこちらを見た。しかしそれは戦闘中にしては致命的。

虚がその隙を見逃すわけがなく、陰陽師の体に虚のその巨大な拳が迫っていく。

俺はチツと舌打ちを一つすると、その巨大な拳を横から切り裂いた。

「油断すんじゃないねえ！！ 死にてえのかっ！！」

「す、済まぬ。少し血が少なくなっただけ……と……」

虚は血が噴水のように噴出す腕を抑えながらも、こちらを睨みつける。

『てめえ……やりやがったなあ……』

「その軟弱な腕を切ったまでだ」

『……軟弱だと？ 中級大虚である俺様の腕が軟弱なはずがねえ
！！』

やっぱり中級大虚か……。なぜこんなレベルの奴らが来てんだよ。

「知らんな。お前が弱いだけだろ？」

『殺してくれるわあ！！！！』

「陰陽師い！！ 下がってろ！！」

俺は怪我人である陰陽師を後ろに下がらせると、虚が残った右腕での攻撃を右に跳んで避ける。

腕のあたった地面は決れ、衝撃で石が飛び散る。俺はその隙を見て、斬魄刀を解放する。

「猛る獅子の王となれ——… 『雷獅丸』！！！！」

俺の解号とともに斬魄刀の柄尻に長い鎖が現れ、その先に金属製の輪が付き、刀身に雷を纏いだす。

俺は刀を頭上に振り上げると、そのまま左頭上から、左足方向に素早く切り下ろす。

そのまま流れるように、俺は残像を残すような斬撃を一つ、二つと繰り返す。

俺の斬撃には雷が付与され、攻撃のたびに虚に向かって雷が放たれていく。

敵である虚は、俺の攻撃をガードしようとするが、雷が体を突き抜けていく。

虚であろうとも、体は水分で出来ているはず。傷口から通る、高圧電の雷に体は硬直し、

虚はこちらを攻撃する隙がない。俺はそのまま畳み掛けようと接近するが、虚はこちらに腕を向けると虚閃^{セロ}を放ってきた。

俺は虚閃をモロに受け、数十mふっ飛ばされる。

上半身の服が吹き飛び、ガードした左腕が火傷によって焼き爛れている。

戦闘に支障はないが、体勢が崩れ大きな隙が出来てしまった。

虚はそんな俺にとどめを刺そうと、虚閃を溜め始める。

『死ねえええ死神がああっ!!!』

「ぐっ……」

俺はいつか来るであろう衝撃に備え、身を固めた。

「『炎帝滅殺』……！」

しかしその時、虚閃を放とうとした虚の頭を、何mも離れている俺をも焦がしそうな炎が襲う。

炎が放たれた方向を見ると、そこには札を右手に構えた陰陽師が立っていた。

どうやら虚の攻撃は、後ろに下がっていた陰陽師によって中断されたらしい。

俺はその隙に体勢を整えると、雷獅丸を両手に握りなおす。

「すまねえ助かった」

「いや、お互い様さ」

虚閃を受けても戦えただろうが、もしまともに攻撃を受けていたら流石に苦戦を強いられただろう。

「……おい、陰陽師。名前はなんて言っただ？」

「名前を聞くときは、自分から言っるのが決まりじゃないのか？」

「……まあそうだな。俺は獅子堂 雄希って言っただ。お前は？」

「我か？我はな——……」

そこで陰陽師は、少し区切る。

「——…清明。安部 清明だ。平安京一の陰陽師だと自負している」

ナ、ナンダッテ！。

まさかとは思ったが、あの安部清明だとは……。
つか、コイツ生身の人間の癖に強すぎだろ、オイ。
……まあいいや、どうでも。色々考えても面倒だし。

「……とにかく倒すか、清明」

「ああ。わかった」

俺は雷獅丸、清明はお札を手に虚と向き合う。
虚はどうやら邪魔した清明に怒り心頭らしい。

『死ねえ屑どもがあああああ！！！！！！！！！』

「行くぜええええええええつ！！」

「醜い妖怪めがつ！ 滅してくれる！」

俺達はぶつかり合い、数刻の激しい戦闘をした後、虚を倒すことに成功した。

ちなみに俺の戦闘の被害は、北東の山一つにふもとの森林、半径二キロを破壊し尽くした。

正直戦闘区域を空間凍結させていなかったら、被害がやばかった。

そういえば俺が弱すぎじゃねって思った人もいるだろうが、現世行くとき限定霊印してるからね。

しかも普通なら霊力を本来の2割にするはずなのに、俺だけ1割だからね。

負けるかと思ったけど、まあ清明と共闘したからね。楽勝ですよ、ええ。

え？ 清明の記憶は消したのかって？ 消してませんが何か？
今は飲み仲間です。

「まあまあ、いいじゃないですか、元柳斎さ〜ん」

「キモイんでやめてください」

元柳斎の態度が冷たい。それに喋り方も爺言葉じゃない。

「給料50年間、6割減らしますから。以上」

「いやあああああああ！！」

今日も平和だな
――
……

続く

第4話 昔の若き隊長達（前書き）

） 1 1 ・ 4 ・ 4 改稿

西暦を変更 1 8 0 0 ↓ 1 7 0 0

第4話 昔の若き隊長達

s i d e 雄希

さて前回50年ほど減給された俺だが、時は既に江戸時代。前回より900年ほど経っている。大体西暦1700年ごろだ。

死神統学院が真央霊術院と言われるようになって、何百年か経っている。

今回はそんな真央霊術院でのお話だ。

さて、俺は今日、真央霊術院へと足を運んでいた。

何故かというと、元柳斎とお茶を飲んでいる時、聞いたことが気になったためだ。

どうやら真央霊術院の生徒に、京楽と浮竹という優等生がいるらしい。

元柳斎が自ら鍛えた愛弟子らしく、その実力は計り知れないものだという。

「という事でやって来たわけだが……」

つか、何処にいったよ。……とにかく歩いていくしかねえな。
と、まあそういう事で歩き回ってみることにした。

そして数十分。

真央霊術院内の廊下を歩いていると数十m先に、一人の男子が女生徒を追いかけているのが見えた。

結構だらしない顔をして追いかけているので、傍から見れば唯の変態にしか見えない。

よし。あれが京楽春水だな。あいつの父も、爺さんも、そのまた爺さんもあんな奴だった覚えがある。

たぶん京楽家の血にはそういう遺伝子があるんだろう。流石、京楽家。そこに痺れる、あこg(ry

と、この世界にきて第二原作メンバーを見つけた訳だが、別に話すことないし、男に興味は無いので放って、そのまま離れることにした。

次に浮竹だが……どうやら休みらしい。

一目ぐらい見たかったが、流石にまた来て見るほど興味もないので、早々に諦めた。

早すぎだと思つかもしれんが、元々興味ないものには諦めが早いのでそんなもんである。

あとここに来て思い出したんだが、京楽らと同じぐらいで卯ノ花もいたはずである。

一応真央霊術院の事務員に聞いてみたんだが、既に卒業して十三隊に入隊しているらしい。

入隊先はやはり四番隊。それ以外ないと思っていたが、一応聞いてみた。

一々隊舎の事務に來た事を告げるのも面倒なので、俺は氣配を極限に消すと、隊舎に侵入した。

.....

.....

.....

.....

...

俺は人氣のない廊下を、音を立てないように忍び足で歩いている。時々人が通る時があるが、その時は天井に張り付いたり、部屋に隠れたり、最終手段としては相手を氣絶させるといふ強行手段を用いた。

だって、どうしようもなかったし……。氣絶させた隊員は、適当に部屋に投げ込んでおいた。

——おっと、どうやら人が来たらしい。

俺は曲がり角から聞こえる声に反応し、急いで天井に張り付く。
その直ぐ後、角から男性隊員が一人歩いてきた。そのまま通り過ぎると思いきや、何故か隊員の肩に乗っている鳥がこちらに向かって飛んできた。それに気付き隊員がこちらを向こうとする。

俺はこちらの顔を向く前に、隊員の後ろに降り立ち、手刀で首を打ち気絶させた。

俺はそいつを何処かに隠そうと、体を掴んだが少し離れた所から、こちらに向かってくる気配を感じた。俺は瞬時にそいつを置き捨てると、角の向こうにあった部屋へと飛び込んだ。

部屋に飛び込んだ後、気絶した隊員に声をかける声が聞こえたような気がしたが、俺には何も聞こえない。聞こえたとしても、反省もしないし、後悔もしない。

「あらあら。どうなされたんですか？」

俺はバツと声のした方を振りむき、声の主を見てみた。
するとそこには美少女がいた……上半身半裸の。

雄希に400000のダメージ。雄希は吐血した。

「グフツ……な、何という破壊力」

「たいへん、血が……」

その美少女は半裸ということに気が向かないのか、その豊かな胸をぶるんぶるん揺らしながらこちらに近づいてくる。

「そ、それ以上近づくな、美少女よ。危ないぞ（主に俺が）！！」

「あら、美少女だなんて（ぽっ）／＼／＼」

美少女は両手を顔につけ、顔を左右にいやんいやんと振っている。しかしそうすれば、当然胸も……。

「（ぶふうう——！！！！）」

とうとう俺は鼻血を噴水のように噴き、後ろにぶっ倒れた。

「……わ、我が……人生に……悔いなし（ガクッ）」

「あらあら、大変。大丈夫ですか」

俺は左腕に柔らかい感触を感じながらも、意識を失った。

俺の意識が深い暗闇から浮上してくる。

「ぐう……こ、ここは……？」

「気が付きましたか？」

俺は知らない天井を見つめたのに、あの名言を言わなかったことに、少しショックを受けながらも、声のする方を見てみた。
どうやらベッドの横の椅子に座っていたようで、意外に近い距離にその人はいた。

「美少女……」

「私の名前は美少女じゃありません。卯ノ花烈といいます」

「ああ、すまなかった。俺の名は「獅子堂雄希様、ですよネ？」
知ってたのか……」

「それは有名人ですから」

「あまり目立ちたくないんだけどな……」

「一々反応されるのも、結構面倒だし……」。

「あれからどれくらい経ったんだ？」

「そうですね……二時間程度でしょうか」

「他の奴らは知ってるのか？ 俺が来た事」

「いえ、説明もし辛いので黙っています」

「そうか。不法侵入だし、良かった……」。

「バレてもここの隊長には特に言われなと思うが、元柳斎に怒られそうだな。」

「そうか、ありがとう」

「いえいえ。そういえば何故ここにいたんです？」

「ああ。それはだな――…」

……なんていえばいいんだろ。

貴方に会いにきました、とか？

いや、間違っではないんだが…

…。

「それは？」

「君を見に来た」

「え？」

言っちゃった。なんか告白しに来たみたいな感じに聞こえるな…
…これだと。

「優秀な隊員がいると聞いてね」

「あ、ああ。そういう事ですか」

「ん？ なんだと思ったんだ？ 卯ノ花よ」

「いえ、べつに……／＼／＼」

「まあいいけどね…」

とりあえず美少女である卯ノ花も見れたわけだし、家に帰ろうかな。

そういえば家の場所とか言っただけ、瀟霊廷に普通に建ってるよ？

まあ少し大きいけどね。武家屋敷とか好きだったから、やんちゃして大きくすぎたけどね。

多分朽木家より大きいんじゃないかな。いろいろ秘密もあるけどね。一応貴族の住む区域に建ててあるから、あまり人通りが少ないけどね。屋敷の管理とかは、適当に作った義骸に義魂丸をいれてそいつらに任してある。おおよそだけど、100人ぐらいはいたと思うけど。まあ色々役目が別れてるから。

「じゃあ、そろそろ帰るわ」

「はい。気をつけて帰ってくださいね」

「ああ。卯ノ花も頑張れよ」

「ありがとうございます」

俺は挨拶を終えたあと、卯ノ花と別れると、家へと戻るため部屋を出た。

帰りも人に見つからないよう気配を絶ち、無事脱出に成功した。

しかし何人か見ていたのか、その後元柳斎にばれ、5時間ほど説教された。

別にそこまで怒らんでも……と反抗すると、2時間ほど時間が延びた。

そんなんだから老けるのが早いんだ、爺め。

続く

第5話 新任の儀（前書き）

前回の西暦を1800から1700に変更。

第5話 新任の儀

side 雄希

さて、前回上半身裸ということにしないという、予想外の天然が発覚した卯ノ花との出会いや、その他諸々があつた日から、百五十年ほど経つただろうか。

この百五十年の間に、京楽、浮竹、卯ノ花の三人は隊長になった。何番隊かは、原作と一緒にだ。

八番隊隊長に京楽、副隊長に矢胴丸リサ。十三番隊に浮竹、副隊長は海燕ではない。

卯ノ花はもちろん四番隊。副隊長は山田清之介、山田花太郎の兄である。

この数十年の間に、四楓院家の夜一が二番隊隊長になっており、副隊長には大前田希千代の父、大前田希ノ進が担当している。

他にも、六番隊隊長に白夜の爺さんの朽木銀嶺、副隊長には白夜の父、朽木蒼純。

十一番隊には、更木剣八が後に倒すであろう隊長、鬼徹城剣八がいる。

矢胴丸リサ以外の仮面の軍勢組は、愛川羅武、六車拳西、久南白、猿柿ひよ里がすでに隊長格に就任している。

ちなみに七番隊隊長である愛川羅武の副隊長は小椿刃右衛門、小椿仙太郎の父親。

十二番隊副隊長のひよ里の上官、隊長である曳舟桐生はまだ零番隊にはいつていない。

ローズこと、鳳橋楼十郎が後に就任するであろう三番隊隊長には、名も知らない隊長がおり、副隊長には射場鉄左衛門の母親である射場千鉄がいる。ローズは現在、三番隊第三席にいる。

そして今日。隊首会があるわけだが、新しく隊長になる奴がいるらしい。

それが平子真子。五番隊副隊長だったが、隊長が退任したことに、隊長に昇格された。

空いた副隊長の座には、BLEACHの悪役である、後の五番隊隊長の藍染惣右介が昇格。

ちなみに元五番隊隊長は、零番隊へと昇格されている。

「五番隊に新たに隊長が就任するんだってね、春水」

現在は隊首会の少し前。場所は一番隊の隊舎。俺の周りには、他の隊長達も集まっている。

「そうらしいねえ。確か拳西くんや羅武くんと仲がいいとか」

「ふん。本当なのか、拳西」

一応知っている俺だが、ここは暇潰しの話を続けるためにも聞いておく。

「そうっすね。他にも仲いい奴いるんすけど、今回隊長に昇格するシンジとは同期っすから」

「へえ、いいねえ。仲良くて」

「まあそいつバカですけどね」

関西人の血とか入ってそうだからね、真子。

「来たみたいだよ、新隊長。総隊長が並んでまてってさ」

皆と話していると、羅武が近くに来て言った。
おっと、どうやら来たらしい。俺は聞いて椅子に座る。

ちなみに言つてなかったが、俺の位は総隊長より上位にある中央四十六室より上。

全ての命令に従わないし、従えることは出来ない。

まあ役割としては、総隊長の相談役みたいなもんだ。

昔元柳斎に王族になってほしいと言われたが、軽く拒否った。

何かあった時動きにくいし、なんか面倒な気がした。

だから最終的に相談役になった。まあ、あんまり相談されないけどね。

ちなみに俺が座っている椅子は、総隊長の椅子の隣にある。見た目は一緒。

俺が座ると同時に、大きな扉が開き、新隊長である平子真子が入ってきた。

「あれま、俺最後かいなあ。みんなこっち向いて、緊張してまうわ……」

正直、緊張してるような顔にはまったく見えない。
むしろダルそうに見える。

「おせえぞシンジ」

「そんな事言わんといてや、拳西」

拳西の言葉に、真子は軽く返す。

「早よう入らんか！」

「ぐほおー！」

そこへ入ってきた元柳斎によって、真子は杖でふっ飛ばされる。

「……総隊長、ナ、ナイス突っ込み（ガクッ）」

「なにを遊んどるか、早よう並ばぬか」

「……わかってますがな、総隊長」

軽くスルーする元柳斎に、真子は少しテンションが下がっている。
まだまだだな。そんな事元柳斎には、効かないぜ。

なぜなら昔から俺がふざける度に、元柳斎が突っ込んでたからな。
すでに元柳斎はそういう事に慣れてるのさ。

「それではこれより、新任の儀を執り行つ」

元柳斎は椅子に座ると、話を進め始める。

「各隊長の耳には伝わっている事と思うが、七日前五番隊隊長片桐当馬に昇進の為、退位せよとの命が下った。それに基づき、同日より新隊長選任を開始し、その旨各隊隊長に通達。翌日、七番隊隊長愛川羅武の推薦により、五番隊二位の副隊長を召喚した」

そこで元柳斎は一度話をきる。

「そして昨日、この山本元柳斎、並びに隊長三名立ち会いの下、隊首試験にて隊長資格を検分。その能力・人格に申し分無しと結論した。よって――…」

みんなの視線が一つに集まる。

「――…ここに元・五番隊副隊長平子真子を、五番隊新隊長に任ずるものとする」

ちなみに十一番隊隊長、鬼嶺城剣八だけ新任の儀に来てなかった。

[illegible]

という事で新任の儀が終わったし、どっか遊びにいー。
つっても何処いこっかな……よし、二番隊のトコいこ。

.....

.....

.....

.....

.....

「ういー。遊びに来たぜー夜ー」

Bannonと隠密機動のある、二番隊の隊首室の扉を開ける。
そこには黒い肌が艶かしく、立派なお胸を持つ夜一がいた。

「なんじゃ、雄希か。どうしたんじゃ？」

「特に用事はないけど、遊びに来た」

「暇な奴じゃのお、おぬしは……」

「まあね。特にする事もないしね」

むにむにと夜一の胸をつつきながら、返事をかえす。
張りがあって、サイコーだな。つつくとポイントと跳ね返ってくる。

「何するんじゃ、雄希。感じてしまっじゃろ」

「…いや、そこは嫌がれよ」

こいつって何か外れてんだよね。

多分頭のネジ、何本か緩んでるな。

「なんか嫌な事を考えられたような気がしたんじやが……」

「気のせいじゃね？」

女ってセンサーでも付いてんのか？マジ恐ええ…。

「そういえば今日は碎蜂いねえのか？」

「なんじゃ。若いおなごを前にして、他の女が気になるのか？」

「バカ言ってるじゃねーよ…。ただアイツおちよくるとおもしれえからな」

「そうじゃな」

「で、いんのか？」

「ああ。呼べばすぐに来ると思うぞ。碎蜂——、少し来てくれ——」

夜一が呼ぶと、碎蜂はシュタツと言う感じに直ぐにきた。

「夜一様、呼びま——ああん！」

「よお、碎蜂。お久しぶり」

「ま、雄希様！？ お、お久しぶりでござ——じゃなくて、なに揉んでるんですか！」

なんだそのままスルーかと思ったのに……。

「いいじゃん。特に揉むほどないのに」

「……殺しますよ」

「それは困る」

俺は胸から手を離すと、碎蜂から離れた。

「それで何の用なんですか…」

「いや、特に」

「無いのに、呼ばないでくださいよ……」

「良いじゃないか。ただ美少女を一目見たくて」

「び、美少女／＼／＼じよ、冗談はやめてください」

「じゃあ冗談で」

「嘘なんですか!？」

やべえ。おちよくるのおもしれえ。

碎蜂、ガーーンって感じになってる。

「そうおちよくってやるな、雄希」

「まあこの辺で許してやるか」

「……もういいです」

そう捻くれんでも……。

「別に美少女は嘘じゃねえよ」

「／／／／／／／／／／」

俺がそう言っていると、碎蜂の顔は熟した林檎より真っ赤になってしまった。

碎蜂はその状態のまま固まってしまっている。

「ワシはどうじゃ?」

すると夜一が、俺の背中にその豊かな胸を押し付けながら聞いてきた。

「夜一は美少女、っていうより美女だな。結婚してくれ」

「いいぞ」

「マジでー!!」

「冗談じゃ」

なんだ、冗談か。ガックシ……。

「（ぼそっ）別にしてもいいんじゃないかのお……」

「え？ 何か言った？」

「いや、なにも言っていないぞ」

がつくりしてたから、何も聞こえなかった。
確かに何か言ったような気がしたんだけど、
気のせいかな？

「まあとりあえず帰るわ」

「そうか。また来るんじゃないよ」

「ああ。またな」

俺は隊首室から出ると、そのまま自分の家に帰った。
そういえば碎蜂、固まったまま治らなかったな……。

続く

第6話 ある日の出来事

— s i d e
雄希

あるうゝひいゝ
♪ もりのなかあゝ
♪

あゝ
♪

びしょうじょがあゝ
♪ おちていた

.....
♪ じりじり。

そりゃあ何処かに美少女落ちてねえかなあ、とか思ってた流魂街の端にある森に来たけど、流石に本当に落ちてるとか思わねえじゃん？ まさかフラグだったのか……。

にしても死にかけだな。多分霊力持ってたそうだから、栄養失調かな？

ほら、霊力持ってるとお腹空くから。この辺、治安悪いからねえ。とりあえず四番隊に持って帰って、卯ノ花に見てもらうか……。

俺はその美少女を抱えると、瀨霊廷の方へと走り出した。
ちなみに少女は気絶しています。

……

俺は四番隊隊舎前までやってくると、いつも通りに不法侵入し、

卯ノ花がいるであろう隊首室の屋根裏までやってきた。

俺は天井の板を外し、シュタツと飛び降りる。副隊長である山田（兄）はいなかったので好都合だ。

卯ノ花は一人、お茶を飲んでくつろいでいた。見ると机の隅には報告書らしき物が積んである。

どうやら休憩時間のようだ。それも俺的には好都合。

「卯ノ花さんや。少し良いかね」

「はい。なんでしょう」

俺は途中から背中に背負っていた少女を下ろし、卯ノ花に見せる。

「あらあらあら。とうとう犯罪に手を染めましたか……残念です」

「とうとうって何だよ！！ ていうか、いつもどんな目で見てんの！？」

「冗談です」

びっくりだよ、卯ノ花さん。そんな人でしたっけ？
腹黒そうだったのは知ってたけど、冗談は言わないと思ってたよ…。

「それでその女の子はどうなされたんですか？」

「ああ。実はカクカクシカジカでな…」

「そうだったんですか…」

「え！？ 今のでわかったの！？」

「いえ、なにも」

「なんだよ、もう！ 少し期待しちゃったよ！」

しかし、卯ノ花は依然と笑顔を絶やすことなく聞いてくる。

「それで？」

「……はあ。もういいよ。実はな——…」

俺はこの顛末を話し始めた。

「森のなかで倒れてたんですか……」

「ああ。流魂街じゃそう珍しくないことかもしれないが、見つけてしまったもんは仕方ない」

「そうですね。そういう人を無くすのも死神の仕事だと思っんですが……」

「死ぬ人間は多いから……仕方ないさ」

「……とりあえず先にこの子をどうにかしましょう」

「そうだな。よろしく頼む」

その後、卯ノ花にその子を任すと、卯ノ花は治療室に入ったので、俺は部屋の外で待つことにした。

症状は軽いのか、すぐに卯ノ花は治療室から出てきた。

「どうだった？」

「軽い栄養失調だと思います。これなら栄養あるものを食べさせれば、直ぐに治るでしょう」

「そうか……それは、よかった」

「いまは安静にして、起きたらなにか食べさせましょう」

「そうだな」

俺は未だに眠っている少女をベッドに移すと、起きるまで卯ノ花とお喋りしながら待つことにした。

.....

.....

.....

.....

.....

「.....ん.....うう.....」

しばらく卯ノ花と世間話をしていると、ベッドの方から声が聞こえた。

どうやら気が付いたらしく、もぞもぞと動き出した。

「.....んう.....じ、ここは?」

「静霊廷にある四番隊隊舎だよ、少女」

「!？」

突然の声に驚いたのかビクンツと体を揺らし、素早くこちらを振り向いた。

「……あの、あなたは？」

「マ○ケル・ジャク○ンです」

「マ、マイ○ル？」

ふざけてると、卯ノ花に頭を小突かれた。

「なに言ってるんです……気分はどうです？ 悪いですか？」

「……いえ、大丈夫です」

「そうですか。お腹が空いてるでしょう。いま準備を——……」

そこで俺は準備してた物を取り出す。THEお粥。卵入りスペシヤル。

「——…そう言うと思って、準備をしてました」

「……いつしたんです」

なにか疑わしい目で俺を見てくる卵ノ花。

「秘密です」

「……………」

男には秘密がいつぱいなんです。

「……まあいいでしょう。ではゆっくり食べてください。
急に大量に食べると、戻してしまう可能性がありますから」

卵ノ花は俺の手からお粥をブン取ると、少女へと手渡す。
なんか最近卵ノ花の、俺への扱いが酷くなった気がするぜ。

「ありがとう……」

「いえいえ」

少女はお粥をたっぷり時間をかけて完食した。

「それで少女よ。質問があるんだが……」

「……なんですか？」

「スリーサイズ……」

——ズガァンッ！！！！
↑机が破壊される音

「……………雄希さん？」

「じよ、冗談じゃないですか！ 卯ノ花さん」

「次ふざけたら……………もぎますよ？」

……………やばい……………もがれる。

何かもがれるかって？ 男の勲章だよ！

「冗談はさておき。少女の名前は何なのかな？」

「（冗談？）……………私の名前は乱菊。松本乱菊、です」

ほほう。乱菊ちゃんですか。

……………よし、置いてこよう。今からでもやり直せる。

だってギンとの出会い潰しちゃったよ？ 俺。どーすんだよ、この野郎。

……………ま、いっか。別に大して問題はないだろ。

「……………ほうほう。いい名前じゃねーか、乱菊ちゃん」

「あ、ありがとうございます」

「さて、名前も聞いたことだし本題だ」

「本題？」

「ああ。君には二つの選択肢がある。流魂街に戻るか、死神になるかだ」

力はあるしね。原作どおりなら中々優秀な人材だろう。

「……死神」

「ああ、死神だ。君には力がある。ここに残るなら家は俺の家を使えばいい。そこから真央霊術院に通えば楽だろうね。それを決めるのは君次第。さあどうする？」

「……………」

まあ早すぎるか。急いで決める事柄でもない。

「別に今日中に決めなくともいい。あしと」なります!」はいね……」

「なります、死神。ならしてください」

乱菊ちゃんは俺の目を真っ直ぐ見詰める。
べ、別に見惚れてるんじゃないんだからねっ!
男のツンデレはキモイ。そう実感した瞬間だった。

「いい目だ。これから頑張るといい、乱菊ちゃん」

……よし。これからの方針も決まったし、帰ったら歓迎パーティーしないと……。
さあ、準備準備。他に誰か呼ぼうかな? ……やっぱやめとこ。

俺は乱菊ちゃんを抱えると、卯ノ花に別れを告げ、家へと帰った。

乱菊ちゃん、予想以上に軽い。もっと栄養価高いもの食べさせないと。

お酒は飲まさないけど。肌に悪そうだし。

続く

第7話 変わり目

side 雄希

おっす！ 皆のお兄さん、獅子堂雄希だ。
そういえば数年前に、十二番隊隊長の曳舟桐生が退任した。
ひよ里がなんか嘆いていた。まあ曳舟桐生はひよ里にとって、母
親みたいな存在だったらしいからな。

その後は真子の時みたいに、推薦された新たな隊長が浦原喜助だ。
ひよ里は気にいらならしく、時々俺んちに来ると愚痴を言っ
ている。

正直勘弁してもらいたい。浦原がどうや、真子がどうやよ言われ
ても、どうしようもない。

以前拾った乱菊は現在、真央霊術院にて死神になるため勉強に励

んでいる。

男どもが気になる体型だが、流石に見た目はまだ10歳ぐらい。貧乳だ。

いや、貧乳ではない。既にB、もしくはCぐらいは言っていると思う。

なんでわかるかって？　だって一緒に風呂入ってますから……。ロリ言うなっ！

普通12歳って、一緒に入らないと思うだろう？　何故か俺が入っていると、突然入って来るんだ。

しかも胸を凄い押し付けてくるんだ。ニユルニユルだぜ？　興奮しちゃうよ、もう……。

それに寝て起きると、何故か横にいるからね……。裸で。

ラ。か！　と思っただね。ほら、。ラもよく、リ。の布団に入ってたじゃん？　そんな感じ。

俺が注意すると、涙目と上目遣いのコンボで、…だめ？　って聞いてくるんだぜ？

そんなの鼻血ブーで、バタリだよ。倒れちゃうよ、ホントに。いや倒れたけどね。

まあそれらは置いて、あと気になる事が幾つか。

例えば乱菊に聞いたんだが、真央霊術院に優秀な奴がいたらしい。いたらしいとは、そいつは既に卒業したらしい。それも1年だ。名前は市丸ギンという、見た目12歳ぐらいのキツネ男だったという。

とうとう来たね、ギン。まあ特にどうとも思わないから、気にし

ないけど。

あと浦原が技術開発局を設立した。

まあ俺が昔、設立させようかと思ったけど、浦原がたてるからいいかなと思ってやめておいた。

それに俺がたてると、俺が局長やらされそうだったから、絶対にやりたくなかった。

そういえばま前に浦原見たとき、マユリが一緒にいた。ついでにひよ里も。

いや、別に離しかけてはないよ？ 遠くから見ただけ。

俺といえば最近はや一と一緒に白夜をからかったり、その辺散歩したり、各隊の美少女隊士をナンパしたり、矢胴丸が七緒（幼女）と読書してるのを横で見たり、碎蜂を苛めたり、少し気にいった娘とやっちゃったり、なんか性欲溜まって卯ノ花の胸揉んだら予想外に感じたり、そこから発展させようかと思ったけど怖いから止めた、というんなことをした。

まあ時々下ネタが入ったかもしれないが、そこはスルーして欲しい。お兄さんとの約束だ。

ただ卯ノ花の欲情した時の、目の潤いとかその辺がかなりやばかったという事だけ報告しておく。

あれは逆に引いたね。もう卯ノ花、グチャグチャだったよ、いろいろと。

ちなみに浦原が隊長になってから、既に何年か経っている。

既に流魂街では変死事件が発生している。現在九番隊が先遣隊を出し、残りは待機中だ。

多分原作どおり、先遣隊も藍染にやられているだろう。

正直、今なら藍染を殺すことができる。しかし理由がない。理由なき殺しは、唯の殺戮だ。

将来の犠牲を考えれば殺した方がいいが、正直どうしようもない。このまま時を待つしかないだろう。俺は真子たちを最大限援助するつもりだ。

後は残される碎蜂の誤解をとりたり、藍染を警戒したりしないと
いけない。

元柳斎に藍染の事を言いたいが、逆に警戒しすぎると流石に怪しまれる。

このまま現状を並行させていくしかないな。

そしてとうとう悲劇は起る。

——ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン、ガン——
！！

——緊急招集！ 緊急招集！ 各隊隊長は即時一番隊舎に集合
願います！！

——九番隊に異常事態！

来たか……ついにこの時が……。

——九番隊隊長六車拳西、及び副隊長久南白の霊圧反応消失！
それにより緊急の——…

俺は今回の事に手を出さない。
とりあえず虚化した後の事を、考えていくしかない。

——繰り返します。緊急招集です。各隊隊長は即時——…

……とりあえず一番隊舎に行くか。

俺は乱菊の耳掃除を中断してもらって、一番隊舎へと向かった。

え？ 最後が締まらないって？ この小説にシリアスはいりませんっ！

にしてもクソオ！ 折角乱菊とのスキンシップの時間だったのに……。

今からでもいいから、藍染殺そうかな……。

……

……

……

……

……

……

「火急である！」

ここは一番隊舎。

現在各隊の隊長が集まって、元柳斎の説明が始まったところである。

「前線の九番隊待機陣営からの報告によれば、夜営中の同隊隊長・六車拳西、同隊副隊長・久南白、同名の霊圧が消失。原因は不明！これは想定し得る限りの最悪の事態の一つである！昨日まで流魂街で起きた単なる事件の一つであったこの案件は、護廷十三隊の誇りにかけて解決すべきものとなった！よってこれより隊長格を五名選拔し、直ちに現地へと向かってもらう！」

そこでダンツと音がし、浦原喜助が現れた。
「どうかタイミングいいな。」

「遅いぞ、浦原喜助」

「はっ、はっ、はっ……」

疲れすぎだろ…。

喜助はある程度息を整えと言った。

「ボクに……行かせてください……！」

その言葉に何人かの隊長が喜助を見つめる。

「ならん」

しかし元柳斎はその言葉を一刀両断した。

「ボクの副官が現地に向かってるんす！　ボクが……」

「喜助……！」

夜一は喜助の言葉を遮った。

喜助がビクツてなったけど、俺もビクツてなっちゃったよ。正直、不意打ちに近い大声って、慣れるものじゃないよね。

「情けないぞ、取り乱すな！」

夜一は少し喜助を睨みながら声を上げる。

「自分で選んで行かせた副官じゃろう！ おぬしを取り乱すのは、其奴への侮辱じゃというのが解らんか！！」

喜助は啞然としている。

「…続けるぞ」

夜一にいい所を取られたから、少し元柳斎の声が小さい。

「三番隊隊長鳳橋楼十郎、五番隊隊長平子真子、七番隊隊長愛川羅武、以上三名はこれより現地へ向かってもらう。二番隊隊長四楓院夜一は別命あるまで待機。六番隊隊長朽木銀嶺、八番隊隊長京楽春水、十三番隊隊長浮竹十四郎の三名は瀟靈廷を守護。四番隊隊長卯ノ花烈は負傷者搬入に備え、総合救護詰所にて待機せよ」

そこで卯ノ花が異議を唱える。

「お待ち下さい総隊長。負傷者の処置を考えるのであれば、私は現地へ向かうべきではないでしょうか」

「状況が不明である以上、治癒部門の責任者を動かす訳にはいか

ん。現地には別の者を向かわせる」

どうやら他の奴が向かうらしい。
というか鉄裁だけだね。

「入れ」

元柳斎の声とともに扉が開く。

「…握菱鉄裁か…表に出てくるのは久しぶりだな…」

「大層な話になってきたねえ…どうも」

どうやら浮竹や春水達でも驚いたようだ。

「話は伝わっておるな。おぬしら二人には現地向かってもらいたい」

「承知」

「わかりまシタ」

元柳斎の命に二人は肯定の意を伝える。
そこで春水が話を切り出した。

「お——い、山じい」

元柳斎は殆ど開いてない目を、細める。

「や、すいません。あのさ、状況もわからない前線に、大鬼道長と副鬼道長の両方が行っちゃうのはマズいんじゃないっすかね？」

「……………」

元柳斎もどうやら思うところがあるらしい。
少しの沈黙の後、春水に尋ねる。

「……………」
「ならば何とする」

「代わりにうちの副隊長を行かせますよ」

しかし浮竹は疑問に思ったようで、春水に聞いた。

「今から呼ぶのか？」

「そだよ。お~~~~い、リサちゃん」

すると春水の後ろにある窓にヒョコツと人影が出てきた。

「何や！」

「ほらね」

「……………」

ほらね、じゃねーけどな。普通覗き見しちゃダメだろ。
浮竹なんか呆れて黙っちゃったよ。

「隊首会のぞき見しちゃダメって言ったでしょ」

「しょうがないやろ。隠れとるもんほど、見たくなるのが人の性
や！」

その前に規律を守れよ、オイ。
まあ、のぞき見しちゃダメなのか、俺は知らないけど。
まず普通なら覗かないと思うしね。

「話は？」

「聞いたつた」

「頼める？」

「当たり前！」

「じゃ、よろしく」

随分信頼してるようだな、春水は。
というか思ったけど、関西弁喋る女子って可愛く見えない？
なんかキュンッってくるよね。最高だよ、関西ガール。

「…勝手な真似をしようって……………」

「だってこんなでっかい案件、滅多にお目にかかれるもんじゃな

いでしょ。部下に経験積ませたい親心、わかってもらえませんか。大丈夫。ああ見えてうちのリサちゃん結構強いんだから。そんな事なんでゆずってもらっちゃっていいかな？ 大鬼道長さん」

春水の思惑がどうかは知らないけど、まあ喜助を思ってだろうねえ…。

「構いませんぞ。それでは私はお言葉に甘えて、休ませて頂くことにしましょうかな」

そのまま鉄裁が去った後、カツと杖を床に叩きつけて元柳斎が言った。

「それでは長鳳橋楼十郎、平子真子、愛川羅武、有昭田八玄、矢胴丸リサ。以上の五名を以って、魂魄消滅案件の始末特務部隊とする！！」

元柳斎の言葉とともに、各隊長は自分の預かる任務を遂行しに移動していく。

春水が喜助の横を通り過ぎるとき、何か言っていたが、結構世話焼きだと思った。

[illegible]

さて時間はすでに深夜へとなっている。

先程京樂と何処か隊の隊員たちが、誰もいないところに挨拶していたが、すでに催眠は完璧らしい。

俺は藍染と会わないし、斬魄刀のお披露目の時も行かなかったからな。俺は催眠にかかっていない。

しかしそれ故に藍染は、俺を警戒していることだろう。さて如何しようか……。

俺はとりあえず藍染たちがいるであろう森林へと向かった。

.....

.....

.....

.....

.....

...

「ここか……」

先程、鉄裁が撃ったであろう飛竜撃賊震天雷砲が、藍染の断空に止められるのが見えた。

まああそこまで大きい威力を出しとけば、気付く奴は気付くだらう。

ということ現場に来たんだが、地面を見てみると不自然に一部が無くなっている所があった。

既に空間転移と時間停止によって、喜助の研究室とかに移動されただろう。

とりあえずここにも仕様が無いので、一度家に戻ることにした。

しばらく降りていくと、そこには広大な地下空間が広がっていた。温泉やら、枯れた木を植えるなど、遊び心満点である。

下のほうを見ると、夜一と喜助がなにやら話しており、虚化された隊長格たちは離れた所に一箇所に集められている。鉄裁は黙って突っ立っている。

しばらくすると、どうやら話は終わったようなので、適当に降りていこうと思う。

「ういゝす。現状はどうだ」

「！？ ……なんじゃ。雄希か、驚かすでない」

「雄希サン？ 何故ここに…」

そんな驚かんでもいいでしょうに。

「まあ気になってな……真子たちはやっぱ“虚化”したか…」

「！？ ……雄希さん、知ってたんスね……虚化のこと」

「ああ。少しだけだな…」

というか原作知識ですけど…。

「一応藍染が真犯人という事も知っている。昨日喜助を追って、そのまま隠れてたからな」

「そうだったんですか。全然気付かなかったスね」

「まあその辺は俺が何とか調整しておく。お前は、お前のできる事をしろ」

「そうします」

喜助はそう言うと、置いてあつた義骸を弄りだした。
ちなみに鉄裁は結界を張っている途中だ。

「雄希」

「ん？ 夜一か。どうした？」

「碎蜂には適當に言っといてくれんじやろか。あやつはいじけるかもしれんからの」

「その辺も適當に言い訳しとくさ」

「…世話になる」

「また現世に行くとき、会いに行くから頑張れよ!」

「儂がどうかなってしまっかと思うか?」

「ならんな。何せ瞬神・夜一だからな」

まあ捕まらないってわかってるし。

「そろそろ俺はここを離れる。できる事は少ないが、色々やってみよう」

「ああ。達者でな」

「お前もな」

俺は夜一と別れを告げ、直ぐに外に出ると、瞬歩でその場を離れた。

こうしてこの事件は一段落を終え、多くの隊長格が尸魂界を去った。

これから物語はどんどん進んでいくだろう。

しかし俺がいる限り、大きな被害は最小限に抑える。

例えこの命を終えることになっても――…。

俺は乱菊に膝枕されながら、そう心の中で誓ったのであった。

……え？ やっぱ最後が締まらないって？ 気にしちゃ、負けだ
と思う。

続く

第8話 姉妹

side 雄希

前回、多くの隊長格を失いながらも、副隊長を隊長にしたり、席官を副隊長にしたりと色々動き、ようやく瀨霊廷内は落ち着いてきた。といっても既に何十年も経っている。

同居している乱菊も何十年も前に護廷十三隊へと入隊し、10番隊の席官として働いている。

容姿も十代特有の幼さが無くなり、少女から女性へと変化している。

男性全てが気になる体型は、特に凄い変化を与えた。爆乳である。ボンツ、キュ、ボンツだ。

風呂？ 流石に入らねえよ。俺はね？ただ乱菊は一緒に入ろうとしてくる。

本気にも感じるが、俺をおちよくってる気もする。一緒に入るとか襲いかねない。

最近の俺といえば、碎蜂を弄りに行ったり、現世の夜一に会いに行ったりする。

碎蜂は夜一に依存しているといえばそうだが、原作ほど依存はしていない。

原因はもちろん俺だ。結構一緒にいたし、夜一に置いていかれたとき、慰めたしね。

別に夜一を恨んだりとかはしてないよ？ 誤解は解いたし、原作のあれは夜一に置いていかれた寂しさからきたもんだからね。俺がいる限り寂しいとかはない。逆に俺に依存してきている。

夜一については、現世の浦原に会いに行った時についでに会ったり、仮面の軍勢に会いに行ったりついでに会ったり、夜一に会いに行ったりしていた。

仮面の軍勢にそんな簡単に会えるものなのかって？ 俺に不可能はありません。嘘だけど。

まあ夜一は殆ど猫形態だし、時々元に戻ってもすっぽんぽんだ。眼福だけだね。

とまあ色んな出来事を報告してきたわけなんだが……現在、目の前に美少女がいた。

それも子持ちだ。いや、あれは妹か？ どっちでもいいが…。

ここは南流魂街78地区“戌吊”のとある森。

なんか暇だったから、暴れる若き不良達をぶっ飛ばそうかと思っ
てやってきたわけだが、そこには何故か少女がいた。いや、別にい
ても不思議は無いが、まあこの森であまり見るものでもない。

ちなみに乱菊みたく気絶とかはしていない。されても困る。

どうやら困っているようで、少女は困った感じの顔をしている。

どんな顔かは想像次第だ。

とにかくこのままではどうにもならないので、俺はその少女に話
しかけてみた。

「どうした少女。困った顔して」

「え？」

結構見える所にいたんだが、どうやら気付いていなかったらしい。

「…死神、さん？」

「いいえ、ケ。イアです」

「え？」

冗談です。

「冗談だ……で、どうした？」

「……あ、はい。あの、少し生活が苦しくて…」

「それは食べ物か？」

「はい…私とこの子には力があるらしく、お腹が空いてしまっ
て…」

まあこの辺って治安悪いから、食べ物なんて手に入りにくいしな。

え？ なにそれこわい。

緋真つて、白夜の嫁じゃん！

今からでも遅くない。置いて来るんだ、俺！

…… といつても既に瀟靈廷に入っちゃってるんだけどね。

瀟靈壁はどうしたかって？ そんなもん片手で開けていきますよ。
まあ今回は手が空いてないから、足で開けたけど…。

「緋真か…… いい名前だな」

「あ、ありがとうございます／＼／＼」

俺は少女もとい緋真を抱え、瀟靈廷内にある自宅へと急いだ。

そして時は進む。

最初こそ馴染めなかった緋真だったが、乱菊の馴れ馴れしさや、俺の（エロい）悪戯に揉まれ（胸じゃないよ？ ホントだよ？ 揉んだケド…）、少しずつ関係が築けてきた。

家に連れてきた時、乱菊が俺と緋真、ルキアを見て「この泥棒猫！ もう子供まで作って……」とか言ってきたのだが、勘違いも程ほどにしてほしい。

137

「お兄さま……っ！」

「ん？ どうした、ルキア」

俺は寝転んだ状態から、ルキアの方に顔を向ける。

「あの、お姉さまが夕食の時間だった」

「そうか。呼びに来てくれてありがとう、ルキア」

俺は胡座で座りなると、足の上にルキアを置いて、頭を撫でる。

「……………」

可愛いなルキアは……。このままずっと撫でていたい。

「何してんのかしら？ ロリコン 雄希は……」

ふによんつと背中に柔らかい感触を感じ、後ろを振り向いてみると乱菊がいた。

そういえば緋真がこいつの胸を見たとき、四つん這いになって落ち込んでいたな。

というかロリコンで言われた気がしたんだが、気のせいかな？

「早く来なさいよ、ご飯冷めるわよ？」

そういえばご飯だった。ルキアを愛でるばかりに忘れていた。

「じゃあルキア、行こうか」

「わかった！」

俺は立ち上がると、ルキアと手を繋ぎながら夕食へと向かった。

.....
.....
.....
.....
.....

さて、前回から何年か経ったであろうか。

ある日、緋真が体の調子が悪いと言ってきたのだった。
どうやら原作どおり、緋真は病気が何かかもしれない。
というか霊体って病気になるんだな。

ということで緋真を病院やら、卯ノ花のところに連れて行ったの

だが、原因がよくわからないらしい。

多分靈的なことじゃないかということだ。そういう事に詳しくそんな技術開発局に連れて行けばいいんだろが、マユリに見せると改造されそうなので嫌だ。

[illegible]

とまあ、浄霊廷ではできないので、現世に連れて行くことにした。

行く場所は浦原商店。喜助に緋真を紹介、そして早速診断をして

もらった。

結果は、体を活動させるための霊力が減っていく病氣らしい。

原因は聞いてみたが、俺には難しくってよくわからなかった。

治せるみたいなので、しばらく現世へいることに。俺は緋真の治療が終わるまで、現世を散策することにした。

現在、現世は昭和時代。大体1950年ぐらいだろうか。

特に娯楽は面白そうではないし、前世で平成の娯楽を知っている俺はなんか物足りなさを感じた。

ということとで久しぶりに仮面の軍勢に会いに行ったり、夜一と世間話をしたりと、暇を潰していった。

真子がひよ里をからかって、ひよ里に殴られたのが印象に残った。あいつバカじゃねーかと思う。

白は相変わらずマイペースで、拳西に怒鳴られていた。ローズは自分が買ったジャ。プを羅武に先に読まれていたし、リサはエロ本を読んでいた。マジ変わんねーわ、こいつら。ただ少し雰囲気は固くなくなった感じがする。

夜一とは、酒飲んだり、少し戦ったり、猫形態の夜一を可愛がったり、そんなに変わったことはなかった。つか、俺も猫になった

かったので、猫のなりかたを教えてもらった。結構長生きしてるけど、こういう術とかあんまり考えてなかったから、術を教えてもらえてよかった。

まだ浦原商店には紬屋雨と花刈ジン太はいないようだ。鉄裁はいるけどな。

そして一ヶ月程経った頃だろうか。緋真の治療も終わったと言うことで、俺は緋真とともに喜助にお礼いうと、瀨霊廷へと帰っていった。この恩はまた返すつもりである。

緋真のことを心配していたであろウルキアも、俺たちが帰ってくるたび泣きながら抱きついてきた。

緋真もルキアの頭を撫でながら、少し目尻に涙を溜めていた。乱菊もなぜか母親のような、こつ、優しい目をしていた。

ということでの件は、無事終えることとなった。

そういえばルキアが死神になりたいらしい。
話しあいの結果、もう少し大きくなってから真央霊術院に入ることになった

続く

第9話 新種の虚（前書き）

今回はすこしエロ入っています。

たぶん大丈夫なはず。そこは男として気にしない。

第9話 新種の虚

— s i d e 雄希

「新種の虚？」

「そうです。お兄様」

俺が緩い着物を着て、一人でお茶を飲んでまったりしていると、ルキアが話しかけてきた。

すでにルキアは死神となって、七、八年経っている。

あれから時は流れ、ルキアは真央霊術院を入学、そして一年の時

を経て卒業。

この卒業の早さは市丸ギンと同じ早さである。なぜこんなに早いのか……。

それは俺が真央霊術院で教わる事を、入学前にルキアに教えたからだ。

鬼道や剣術、死神としての基本とするものや、その応用を教えていった。

別に魔改造はしていない。ただ真央霊術院で教えてもらえるものを、入学前に教えたただけだ。

とまあそんな感じで変わらぬ日々を過ごしていた訳だが――…

「新種ねえ……被害は？」

「何人かの死神がやられたそうです」

並みの死神じゃあ、対処しきれないということか…。

「今後の対応とかはどうなってんだ？」

「聞いたところ、私の所属する十三番隊から偵察隊がでるようです」

ふ〜ん、偵察隊か……。

「そこに知り合いとかいるのか？」

「あ、よくお世話になっている副隊長の奥さんが今回の偵察隊にいますが……」

「副隊長と言うと確か、海燕か……奥さんは知らんが」

確か志波みなこか、みやこだった気がする。どっちでもいいけど。

「それがどうしたんですか？」

「いや、少し気になってな……」

流石に虚に襲われて死ぬとは言えまい。

「——というか、ルキア。お前はいつも言葉が固いな。お兄ちゃんと呼べ」

「い、いえ。そんな軽々しく呼ばませんよ」

「いいからっ！一回言ってみ」

「…お、おに、おにい…」

「……………」

俺は無言で呼んでくれるのを待つ。

ルキアは顔を赤くして、少しドモリながらもお兄ちゃんと呼ぼうとしている。

「お、お兄ちゃん／＼／＼」

フオ——ツ！！！！ルキア、かわゆす。

いいねえ……こんな妹がいるなんて、お兄ちゃん幸せだよ……。まあ妹じゃあないんですがね。

「よし。もう聞きたい事も聞いたし、部屋に戻ってもいいぞ」

「は、はい。では夕食の時間に…」

俺はルキアが出て行くのを見届けると、一眠りするため畳に寝転び目を閉じた。

[illegible]

え？　まずはここは何処だって？　そんなの俺に聞くなよ。

まあ簡単に言うなら、流魂街にあるどこかの森の中。なぜ森の中かというと、寄生型虚・メタスタシアの偵察が本で行われるため、志波海燕の妻、志波都を殺されないように俺がついて行っている訳である。もちろん俺は気配を消して、隠れてストーキングしている。

ルキアに心の闇、トラウマを持たれても、俺にはそんなの邪魔ではない。

確かにトラウマを持つ、そう儚げな女性と言うのは、それはそれで綺麗に感じるであろう。しかし、やはり女性と言うのは笑っている元気な姿が、一番似合うと思うわけだ、俺は。

なのでトラウマの志波海燕の殺害、その原因となるメタスタシアをぶっ殺しちまおうぜっ！ てな感じで、今回の偵察隊について行っている訳である。

.....

.....

.....

.....

そしてメタスタシアがいるであろう、と報告された現場へとついた偵察メンバー達（隠れて俺）。

そこには木のない開けた場所があり、そのすぐ近くの小山には洞窟があった。

どうやらこの洞窟にメタスタシアがいるようだ。洞窟の中からは虚の気配が感じられる。

偵察メンバーの中から二人程歩き出し、怪しい洞窟へと近づいていく。

そろりそろりと忍んで行っていた矢先、その二人のうちの一人が洞窟から飛び出てきた触腕のようなものに捕らえられ、地面を引き

ずられていく。

もう一人の隊員が助けようとするが、引きずられるスピードが速く、そのまま洞窟の中へと引き込まれてしまった。

緊張感の中、数秒ほど経つと、先程引きずられていった者のものであろう絶叫が聞こえてきた。

その声の中にバリボリと、骨が噛み折られるような音が聞こえるのも気のせいではないだろう。

外に待機している隊員たちの顔は真っ青になっていることだろう。ちなみにこちらからは見えない。

しかし、隊員たちが震えている間も時は進み、洞窟の中からキモイ虚がノシノシ歩いてきた。

『おぬしらか、ワシの睡眠を邪魔する輩は……』

実にキモイ。真にキモイ。キモキモイ。

『死神がうじゃうじゃとおるわ。そうじゃ、ワシが皆喰らうてやるっ！』

メタスタシアはそういうと、死神が一つに固まっているところへと突っ込んでいく。

死神たちはそれを見ると同時に、散開して攻撃を回避。斬魄刀を抜刀すると構える。

メタスタシアの姿を捉えると同時に、斬魄刀を手に死神たちはメタスタシアに切りかかる。

『無駄な事をつ!!!』

死神たちはメタスタシアを切りつけるが、しかしながら近づきすぎた。

触腕が死神たちの体に触れると同時に、死神たちが手に持つ斬魄刀は砕け散った。

メタスタシアは驚きで硬直した死神たちを、手足を振り、勢いよく吹っ飛ばす。

吹っ飛んだ死神たちは傷つきながらも、立ち上がろうとしている。その隙にメタスタシアは、一人の死神へと近づいていった。

死神の名は志波都。志波海燕の妻であり、十三番隊第三席に所属している。

メタスタシアは大きな口を開けると、志波都を食おうとする。

というかここで食べられたらどうしようもないので、そろそろ助けに行く。

俺は茂みから飛び出ると、触腕に触れないようにメタスタシアを切りつけた。

「大丈夫か？ お嬢さん」

「は、はい。大丈夫です！」

「そうか。それはよかった…」

俺はそう言つと志波都へと微笑みかける。

「あう／＼／／」

すると都は顔を真っ赤にして、俯いてしまった。

どうしたのだろうか？　ただ安心させようとしただけなのに……。

『おのれえ死神い！！！！　殺してやるわぁ！！！！』

血だらけになったメタスタシアは、怒りに声を荒らげながらこつちに突っ込んでくる。

俺は触れられる前に決着をつけようと、斬魄刀を解放する。

「猛る獅子の王となれ——…『雷獅丸』！！！！」

解放と同時にいつも通りの姿形に変わっていく。

俺は突っ込んでくるメタスタシアに、刀の先を向けると言った。

「痺れて焦げるよ！！　変態虚が！！」

『死神風情がなめるなああああああつ！！！』

俺は突っ込んでくるメタスタシアに向け、技を発動させる。

「『獅子雷牙』！！」

俺の言葉と同時に、メタスタシアに向け雷を帯びた刀を振り、雷をドンドン飛ばしていく。

メタスタシアは雷の斬撃を避けようとするが、増えていく斬撃に徐々に体に雷が当たっていく。

『ぐがあ！　ぎいやあ！　ごああ！』

「止めだつ！　『獅子雷雷』！！」

メタスタシアに積乱雲から大量の雷が降り注ぐ。

今日は曇りだったので、雷を操るには丁度いい日だった。

どっちみち天候を操れるから、曇りじゃなくても曇りにするけどね。

数十秒ほど雷が降り注いだ後、そこには高電圧の雷によって焦げたメタスタシアがいた。

いた、というよりすでに形はなく、メタスタシアの残骸と言っしかない。いや塵だな、これは…。

というか雷の音が物凄く大きくて、耳鳴りがハンパネエ。

「終わっ たか…」

俺は斬魄刀を元に戻すと、後ろに振り返った。
そこには啞然とする都の姿が……。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

「とにかく戻ろう。立てるか？」

「……腰が抜けて立てません……」

「そうか……よし」

「へ？ きゃー!!」

俺は都をお姫様抱っこする。

「あ、あの、その…… / / / /」

「それじゃあ行くか……おらっ！ お前らも行くぞ！」

「「「は、はいっ！……」」」

俺は少し傷ついた隊員たち（男）に、声をかけ移動し始める。
すると都が俺に話かけてきた。

「……すいません。ご迷惑かけまして……」

「別に迷惑では無いさ」

「でも……」

「迷惑だと思うなら、また何か迷惑料でも返してくれ」

「……はい、わかりました」

俺たちはその後、十三番隊のみんなに迎えられ、無事帰還するこ
とが出来た。

話を聞いた海燕にも感謝を言われ、浮竹にも感謝の言葉を貰った。別に感謝されるほどの事をした気は無いが、もらえるものは貰っておこう。

[illegible]

メタスタシアを倒した日から数日後。

俺の家に都が来た。

「どうした？」

「いえ、数日前の迷惑料を払いにきました」

「迷惑料？」

そんなことも言った気もする。というか冗談だったのに……。

「なにを払ったらいいのか悩みましたが……」

「何にしたんだ？」

「わ、私の体ということぞ、どうでしょうっ！／＼／＼／」

「……………」

「だ、だめでしたか？」

「ふう…………やれやれ…………じゃあ行こうか」

「え？」

俺は都を家に上がらせると、寝室へと向かった。

「まだまだまだああああああっ！！！！！」

「ああ、やあん、あん、はあん／／／／」

俺はその後、5時間にわたる運動をして腰を痛めた。

ちなみに他の皆は入るうにも俺の張った結界によって入れず、結界の外で発情していたらしい。

音も消せたが、その辺は皆を発情させるためにわざと音は消さなかった。

だっていつか襲おうと思ってるし。というか実は乱菊だけ襲ったことあるしね、お風呂で。

だって毎日入ってくるんだぜ、乱菊。俺にどうしろと。

運動の後、汚れきった体を洗うためお風呂へと入った。

乱菊たちは術によって姿を消してから行ったから、気付かれなかったと思う。

というか人妻って、なんかエロく感じるよね。背徳感とか、凄いい心に響く。

続く

第9話 新種の虚（後書き）

都って結婚してね？ という疑問がありましたが、もちろん寝取りです。

人妻ってという言葉って、なんかエロく聞こえますよね。

というか都っていつ結婚したかわかんねえから、寝取りとい選択しかなかった。

自分で決めてもいいけど、そこはこだわりあるから。時間とかに…。

第10話 空座町（前書き）

お待たせしました。

最近リアルの方が忙しく、一ヶ月ほど更新できませんでした。今回更新しましたが、次も何時更新できるかわかりません。読まれる方はすいませんが、気長にお待ちください。

第10話 空座町

side 雄希

ここは現世の東京にある町、空座町。

現在、空座町は重霊地であり、霊圧を探ってみると多くの霊力者を見つけることが出来た。

まだ霊圧が低い者もいるが、あと何年かすれば霊力も増えていくことであろう。

そんな空座町に、何故俺がいるかというと、暇だったからだ。

死神の仕事しろよ、という奴もいるだろうが、ほとんど俺に仕事

はない。大事があつたとき元柳斎に相談されるぐらいしか、俺にやることは無く、他にすることと言えば散歩や、ナンパ、鍛錬ぐらいしかない。

尸魂界の奴らには、空座町に行く事を言っていない。

まあ元柳斎は、俺に放浪癖がある事を知っているから探してはいないと思う。100年ぐらい帰らなかった事もあるしね。他の奴らは慌ててるかもしれないけど。

あ、乱菊とかルキアにはちゃんと言ってるから。言わなかったら俺が殺されちゃうよ。

ちなみに現在は90年代後半。

俺は十年ぐらい前から現世に来て、空座町にて生活をしている。

家は実は大昔からある。昔といっても、えーと、たしか奈良時代ぐらいからだ。

流石に建築技術はもって無いから、他の奴に建てさせたけどね。

日本中に俺の家が建っている。というか世界中に俺の店がある。なぜかって？ そりゃ奈良時代から、商人してましたから。その名も獅子堂グループ。現在も獅子堂家は世界に股をかけた財閥として活躍している。

え？ 名前がそのまんま過ぎるって？ だって面倒じゃん、考えるの。

俺がいない時とかは、殆ど部下に任せている。というか、俺がいなくても任せている。

部下は俺が作った義魂骸。頭の方を弄って、会社の経営を任せている。

といっても別に社員全てが義魂骸ではない。本社や支社、その一つ一つに20人いるか、いないかである。結構いるんじゃない？ と思うかもしれないが、支社一つに3000人ほどいるので、別に多いとはいえない。本社には8000人ぐらいはいるんじゃないだろうか……。

言っておくが、本社は東京の都会の方にあるので、空座町とはあ

まり関係ない。まあ獅子堂グループが出店する店はいくらでもあるので、関係は無い事もない。

いま思えば家というか、屋敷。そう屋敷だ。

武家屋敷みたいのではなく、西欧系の屋敷だ。家の前には噴水とがあるし。

まあ西欧系の屋敷もあるが、京都の方には武家屋敷もある。

ぶっちゃけ武家屋敷のほうは世界遺産にも選ばれている。結構古い建築物だしね。

屋敷の横には剣道場もあったりする。別に飛。御剣流とか、小太刀二刀。神流とか、神。流とかでは、決して無い。

名前は勿論、獅子堂流である。一応居合を主に教えている。

なぜ居合を教えているかと言うと、単純にカッコイイと思ったからだ。いや、やっぱ居合って、男としては憧れね？。流、居合！。みたいなの。斬った後、刀を納めたと同時に倒れる敵。カッコイイ……。

師範代は、体術や剣術、身体的な事を弄った義魂骸。見た目は鍛えぬかれた体をもったお爺さん——とかではなく、実は綺麗なお姉さん。立場的には俺の母親だ。

あと言っておくと、獅子堂グループの社長は俺の父、という名の義魂骸。会長は俺の祖父、という名の義魂骸。俺以外の家族は全て

話が半分それてしまったが、話を戻そう。

現在、まだ原作は始まってはいないが、既に原作メンバー達は生まれている。

というかもう5・6歳ほどになっているだろうか。

どうやらまだ原作への道は遠いらしい。それまでは原作ブレイクでもしておこうか…。

「どうしたの？ まさきくん」

「いや、考えごとしてただけ」

「ふーん、それより何かしようよ！」

ということではある小学校の教室。

現在は昼の休み時間。小学生にとっては、お楽しみの時間だ。ちなみに現在の俺の姿は、可愛いしいシヨタボデイ。

最初はちっさい義骸に入れるかなあ、と思っていたのだが、結構普通に入れた。

少し窮屈に感じるが、時間がたてば慣れていくと思う。

「じゃあ、外にいこつか、織姫」

「うん！」

いまロリコンめ！　とか思った奴、前に出て来い。

いまなら蒼火墜一発で許してやろう。全力でだな。

というか俺も見た目は子供だから、ロリコンとかではない。まあ精神的には大分年の差がありますけど……。すでにこれはロリコンとか言う次元ではない。俺、6000歳ぐらいいてるし。

織姫と言えば、兄・井上昊の事故死だが、これは正直時期がよくわからない。

織姫が中学生の時に死んだというのは覚えているが、詳細まではわからん。

というか事故をどう防ぐかが問題だ。

一護の母・黒崎真咲の場合なら、事前に虚・グランドフィッシュⅠを倒しておけばいいので大分楽なのだが、事故死というのは防ぎにくい。監視しておけばいいのだが、流石に監視をしているだけでは防ぎきれぬかは謎だ。獅子堂グループを使えば、まあ防げるかもしれないが、あまり強引過ぎると信用を無くす。

まったく……面倒なもんだな。

まあそんな将来の事は後でいいだろう。

いまは織姫との遊びに集中しようじゃないか。

「――で、何して遊ぶんだ？」

「そーだねー……じゃあ、野ッカーしようっ！」

「ふむ。野ッカーとはなんだね、織姫隊員」

「はい！ 野球とサッカーが合体した競技です、まさきたいちよ
ー！」

「まったくもってユニークな競技だ。だが採用っ！ さあ夕日に
向かってキックオフだ！」

「いえっさーっ！」

正直言ってる意味がわからないが、そこは勢いとノリでいつてみ
た。

後悔もしてないし、反省もしてない。

というか織姫のノリの良さに、心の中で賞賛を送っておいた。

その後、昼休みの全てを使って、野ツカーをしたのは言うまでも無い。

あれは守備側に、慈悲も容赦も無い競技だという事だけは言っておこう。

[illegible]

その日の夜。

獅子堂家の屋敷では、自室にて今日の報告を聞いていた。

「それで、奴は見つかったのか？」

「現在、空座町を中心に搜索を続けていますが、未だグランドフ
イッシャーは見つかっておりません」

「そうか……」

まあいずれは見つかるだろうが、面倒だな。

俺の敵ではないし、そこまで気にするほどの奴ではないのだが、
黒崎真咲を殺されても面倒なので、搜索は続けてもらう。あいつ結
構隠れるの上手そうだから見つかるかな……。

「まあいい。他に問題は？」

「いえ。特にありません」

「そうか。じゃあ、これからも搜索を続けてくれ」

「御意」

そいつは礼をすると、部屋から出て行った。

俺は部屋に設置している冷蔵庫からお酒を取り出すと、中身を氷
の入ったグラスへと注ぎ、酒を口へと含む……うん、うまい。

度数は結構高い酒だが、俺は酒に強い方なのでかなり飲める。といっても基本酒は飲まず、ほとんどお茶とかジュースとかそんな感じだ。

「……はあ。原作って結構大変だよなあ……」

正直いって、原作って色々ありすぎて面倒事が多い。まあ頑張っていくしかないし、原作メンバーとの関わりって面白いから楽しんでいこうと思う。

俺は一時間ほど酒を飲んで、風呂に入りサッパリした後ふかふかのベットにて眠りへとついた。

続く

第11話 空手、やるぜっ！（前書き）

なんかネタに走ってしまった。
しかも全然進んでない気がする。

第11話 空手、やるぜっ！

s i d e 雄希

実は数年前から、やっていることがある。

それは空手。そう、お察しのとおり有沢竜貴が通っている空手道場である。

最初は何処に通っているかわからなかったが、その辺は調べさした。THE・職権乱用。

竜貴は元々大きい方ではないが、子供の頃はそれはそれで可愛かった。

それにやはり才能があるのだろう。子供にしては強く、型がちゃんと出来ていた。

まあ俺の敵ではないけどね。まず比べること自体が間違いなんだろうけど…。

それと皆、お前の家武道やってんじゃねえか、と疑問に感じたかもしれない。

それについてはちゃんと理由がある。というか理由付けした。

理由とは、獅子堂家と竜貴が通う道場の合同練習としている。

まあ簡単にいえば、違う道場と一緒に練習して視野を広げていうぜっ！　みたいな感じだ。

ちなみにこちらの道場、獅子堂流は居合のほかにも、テコンドー、中国拳法など体術全般、獲物を使用した武術、他多数を教えており、居合を主に教えているだけで色んな武術を教えている。

合同練習を始めた時は結構テレビでも騒がれた。

だって獅子堂流って、殆ど門外不出だし、遊びで秘奥義みたいなものを作ったことあるし。

それを今になって合同練習とか。しかも一箇所だけだったし。

なので日本中にある、仲のいい道場と合同練習することにした。といっても月1だけど。

閑話休題

「まさき、早く練習しようぜー！」

「ういゝ。ちょっと待ってー」

という事で空手道場。

言っておくが竜貴に負けたことは無いので、あしからず。

俺は胴着の帯をキュッと締めると、暇をしている竜貴の元へと向かう。

「おまた〜」

「遅すぎ。あんたゑるよ」

「いやいや。なんでそうなるんだよ」

少し遅れただけでゑるとか……あんた鬼ですか。

「うっさい。早く練習始めるよ！」

「うっす」

「声小さいっ！（バシン！）」

「イタいつ！」

「大きい声出さないと殴るよ！」

もう殴ってるよ……。アレですか、口より先に手が出ちゃう人ですか、そうですか。

あゝ、やだやだ。なんで暴力女って、こつ手が早いんだか…。

「なーにブツブツ言ってるの」

「なんでもねえよ。さあやろつじゃないか、タっちゃん」

「野球なんてしないわよ！」

「南を甲子園に連れてって！」

「うぜえ！」

「つーか、なんでお前がタツ。を知っている……。
。ツチは、子供のお前が知っているような漫画ではないだろ。
いと思ったけど、。ツチって少しエロく見えるよね。…しょーも
ねっ！」

「つーかさ、一護。お前もタっちゃんの相手してやれよ」

「まだ言っかつ！」

俺は追いかけてくる竜貴から逃げながらも、一護の方を見る。
わかっていたと思うが、一護は原作どおり道場にいる。

といつてもまだ竜貴より弱いし、泣き虫だ。最初よりかはまだマシになってきたけど。

「えゝ、嫌だよ。竜貴ちゃん怖いし……」

「何だと、ゴラアアア！！」

「ぎゃあああああ！！！！ 竜貴ちゃんの顔が、女の子とは思えない顔にいいい！！！！」

あちゃー。怒らせちゃったよ、一護。つか、マジで竜貴の顔がテレビでは映せない顔に……。

アレは既に鬼だね、鬼。少し頭の上に角が見えてきた気がするよ。

「どうどう。落ち着けてタッちゃん」

「私は馬か！ つーか、マジでしつけえ！」

「行け！ マキ。オー！」

「ヒビーン……って、なんでやねん！」

おお。竜貴がとうとうノリ突っ込みを……お母さん、竜貴がちゃんと育ってくれて嬉しい」

「だれがお母さんか！」

「おっと声に出てたか。雄希のすっかりさん」

「キモい！」

俺も思ったけど、そんなにハッキリ言わんでも。

「ということでもう帰るわ。じゃーな竜貴」

「え？」

というか既に俺と竜貴以外は帰っている。

だってずつとふざけてたし。結構時間経つのもって早いよね。

俺は胴着を着たまま、道場の前に止めてある車に乗って帰っていた。

「ち、チキシヨ——っ！」

竜貴は事の理不尽さに思わず叫んでしまったらしい。

続く

第12話 虚・グランドフィッシャー

side 雄希

さて、俺が小学3年となつて早1ヶ月。
特に変わった事も無く、時間は過ぎていった。

学校では織姫と遊び、空手道場では竜貴、一護とふざけあう、そんな日々だった。

そういえばこの前噂で聞いたのだが、違う学校に凄いマセた小学生がいるらしい。

そんな奴いねえだろ、と思いながらも調べてみたら本匠千鶴だつ

た。すごい納得した。

というか小学3年生で既にマセてるとか、もう、普通に呆れてしまった。

あと前に織姫と遊んでいたのだが、織姫が突然「バレーミントンしたい！」とか言い出したので、どういう競技か聞いてみたのだが、バレーとバトミントンの合わさった競技らしい。

というかバレーボールをバトミントンのラケットで打つという所から、普通に挫折した。

だってテニスのラケットならまだしも、バトミントンのラケットでは、あの大きなボールを打ち返すと言う動きが出来なかった。頑張ったけど手首が折れるかと思った。

なんか織姫は悔しがってたけど、小学3年の体ではバレーボールすら難しいと思う。

——…とまあ色々あった訳だが、皆は覚えているだろうか？

黒崎（母）の虚による殺人事件を…。

黒崎（母）、というか黒崎真咲なんだが、とうとうそんな時期がきてしまった。

俺としては、「ああ、もうそんな時期かあ……」ぐらいの気持ちなんだが、そうは問屋が卸さない。

死んでも、死ななくても俺には特に影響は無いが、俺的には結構気にいってる人物なので、殺されるのは流石になあ……という感じだ。

まあ一護との関わりで何度も会ったことはあるし、一護の家に行ったときはご飯を頂いた事もあった。

基本俺は、恩ある人に恩を返す奴だ。それに美人だしね。美人は正義だと思うよ、うん。

ちなみに一護の家には当然、一心もいるのだが俺には気付いていない。

名前も一緒だし、顔も似ているので疑問に思っているかもしれないが、多分気付いていないだろう。

だって認識障害、まあそういう感じの術を使ってるからね。一心程度じゃあ気付かないよ。

一心程度、というか元柳斎でも気付かないけどね。あの小僧程度にはばれないよ、俺は…。

閑話休題

まあ話しは戻して、真咲を殺す虚・グランドフィッシャーだが、結局見つかっていない。

獅子堂グループも忙しいし、俺のほうもそこまで時間をかけられない。

虚つてのは基本虚圏に生息しており、こちらから見つけることが出来ない。

餌として魂魄を襲う時のみ現世に現れるから、倒そうとするにはその時しかないのだ。

それにグランドフィッシャーもバカではない。

あいつは既に死神から50年以上逃げつづけている。ランクとしては中の上。

何人もの死神たちを退けているので、尸魂界ではすこし有名な虚だ。

しかも俺が探しているのに気づいたのか、最近現世であまり姿を現さなくなった。

しかし原作どおりなら後1ヶ月ほどで姿を現し、黒崎真咲を殺害するはずだ。

唯一、と言うわけではないが、これはチャンスだろう。グランドフィッシャーを倒す機会としては。

別に恨みは無いが、グランドフィッシャー……俺は、お前を倒させてもらっ………

俺は心の中でそう誓いをたてながら、織姫と野ツカーをするのであった。

——ズゴォォン！

「やったーっ！ ホームラン！」

「……やっぱり、守備側が圧倒的に不利だと思うんだ」

俺の炫きは爽やかな風によって流されていった。

「…とうとう一護に一本取られちゃったよ」

「そうだな。まあ一護も成長するって事さ」

「……はあ。性別も違うし、いつか追い越されると思ったけど、こんなに早いとは……」

「まあ頑張ってくれや」

「あんたは気楽そうだねえ」

「強いからな……じゃ、俺も用事あるから行くわ」

「ああ。またな」

「うい」

俺は竜貴と別れると、直ぐに私服に着替え、黒崎親子を追った。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

はい、現場の雄希です。

現在俺の10m前方には、黒崎親子が雨の中歩いていきます。

にしてもよくこの雨の中を歩けますね。車とか持っていないんですよか？

あつ！いま横を通ったトラックによって、一護がびしょ濡れになってしまいました。

それを見た母・真咲は一護の顔をハンカチで優しく拭いてあげて

います。

……はい、そろそろ面倒なんで戻すことにしよう。
ということで黒崎親子を見張っているのだが、まだ特に問題は無い。

顔を拭き終えて再び歩き出したので、追跡を再開するとしよう。

そして歩きつづけて数分だろうか。

黒崎親子は川が横を流れている道までやってきた。

川は連日の雨によって増水して、近づくのは危険な状態となっている。

しかし一護がそれを見つけてしまったのは、不幸か……。

川の近くには女の子（仮）が立っていた。

見える人にとっては、その子がフラフラとしているのが見えてしまっただろう。

不幸な事に一護は霊力が高く、そして幼いがゆえに、幽霊と生きている人間の区別がつかなかった。

「あ……」

一護は助ける事しか頭に無かったのだろう。

「ちょっと待ってて、母ちゃん！」

「え？」

一護は道と歩道を隔てるガードレールを乗り越えようと、女の子（仮）の元へと走り出す。

「一護！？」

母・真咲が呼び止めるも、一護は助けることで頭がいつぱいで止まらない。

一護の体が10、5、2mと距離が縮むに連れ、女の子（仮）の体が傾き始める。

「だめ！ 一護！！」

その声とともに真咲も駆け出し、一護の元へと向かう。
そして一護の手が女の子（仮）へと届く、その時——
……

「——…縛道の六十一・六杖光牢」
りくくじやうひんしう

女の子（仮）と、一護には“見えない何か”に、六つの帯状の光が胴を囲うように突き刺さり、攻撃をしようとした体の自由を奪った。

「何やってんだ、クソ野郎……」

そこには静かな怒りを持った、“死神”姿の獅子堂雄希の姿があった。

[illegible]

……
 たく、虚も虚だが、一護ももっと落ち着いていこうぜ。

『……死神か。まったく食事の邪魔をしょって……』

「ああ？」

当然、死神の俺には女の子（仮）の後ろに、グランドフィッシュヤ
ーがいることは見えていた。

つか、ある程度霊力持ってたから見えるから、女の子（仮）の後ろに
いる虚を見ると、結構笑える。

「……だ……れ……？」

「ん？」

声のする方を見てみると、俺が使った吊星によって無事着地した
一護がこちらを見ていた。

だつて一護、下に落ちるってのに跳ぶから、慌てて発動させたよ。
まあ真咲が一護を庇って、抱いて落ちていったから、あんまり衝
撃も無いと思うけど。

真咲は既に意識が無いが、一護は朦朧とだが意識があるようだ。

「……うーん、誰って言われても……ねえ？」

だって、結構な頻度で会ってますし？まあ今の姿ではわかんと思うが。

「……ま、君を助けるヒーローってトコだ！ あっ、君のお母さんもね？」

「……ヒー……ロ……？」

「そ、てことで君は寝ておきなさい“白伏”」

「……！……うう……zzz」

白伏を唱えると同時に、光が一護を包み意識を混濁させ、一時的に昏睡状態に陥れた。

白伏は昏睡状態に陥れる事の他に、霊圧を敵に感じ取られないようにする効果がある。

まあ戦っている時に、他の虚に襲われたら意味ないしね。

俺は外部からの攻撃を反射する結界を張る“鏡門”も発動させ、安全を確保した。

「……さて、準備も整ったところで、グランドフィッシャー……言い残す事はあるか？」

『ほほお？　ワシの名も有名になったものだ。して、言い残すことは？』

「まあ50年以上も死神を退ければ、有名になるさ。そこで、言い残すことってのは――…」

俺は腰にある刀に手をかけると、言い切った。

「――…テメエの遺言ってこつたあ！」

俺は刀を抜きさると同時に、瞬時に瞬歩によって近づき、袈裟切りに斬りつける。

『おっと』

グランドフィッシャーは後ろに跳び、俺の攻撃を避けると、長い髪を使って攻撃してくる。

俺はそれを刀で切り刻み、攻撃を防ぐと、相手に右手の人差し指

と中指を向けて発動する。

「――…破道の四・白雷^{ひらい}―！」

ビーム状に飛んでいったそれは、避けようとしたグランドフィッシャーの脇腹部分を貫き、血が噴出す。しかし、あまり効果が無かったのか、そのまま爪による攻撃を加えてきた。

グランドフィッシャーは俺の記憶を読み取って、人形を攻撃できないような人物に移し替えようとしているのだろうが、それを許すほど俺は甘い人間ではない。

俺は伸ばしてきた左手を刀を振り上げることによって切り裂いた。血が噴出すが、直ぐに髪が絡みついて再生する。……うーん、超速再生か？

いや、髪を媒介にした再生か……多分こいつ特有の能力なんだろう。

『くっ……死神めエ……ワシをコケにしょって……許さん……許さんぞ！』

「はっ！ なにを許さねえってのかねえ……」

そろそろ終わりにしようか……こいつの相手も疲れた。

「まあお前が許す許さねえってのはどうでもいいんだ……………終わりにしようぜ……………」

『ワシを舐めるなアアアアアア！！！！！』

俺の言葉に怒り狂うグランドフィッシャーは、髪や腕全ての攻撃手段を使って突っ込んでくる。

それに合わせ俺も斬魄刀を解放する。

「……………猛る獅子の王となれ『雷獅丸』」

俺は解放した雷獅丸をグランドフィッシャーへと向ける。

「消えろ、グランドフィッシャー……………」

『死ぬEEEEEEEE死神IIIIII！！！！』

グラントフィッシャーの攻撃が2 mと迫った直後――
…

「――…降り注げ
“千雷万象”
」

グラントフィッシャーに千にも及ぶ、雷が降り注いだ。

[illegible]

「逃したか……」

結局グラントフィッシャーには逃げられた。

どうやら人形の方を身代わりにして、虚圏に逃げ帰ったようだ。証拠に焦げて真っ黒になった人形らしき物がある。

まさか俺も逃げられると思わなかった。

まあ今回の技は始めて使ったし、しゃーないっちゃ、しゃーないか。

それは追々の課題として、とりあえず――…

「――…出て来いよ、一心」

俺は微かに感じる気配を感じ、懐かしさを思いながらも呼びかけた。

俺が呼びかけると、少し離れた電柱の影から死神姿の一心が現れた。

「見つかってましたか……お久しぶりです、獅子堂さん」

「まあな。つか、お前が敬語とかキモイから。やめろ」

「ええ！！ 酷すぎだぞ、雄希！」

「いや、変わり身早いな……」

まあそこが一心のいい所でもあるんだが…。

「……にしても、なんで雄希がここにいるんだ？」

「まあ、たまたま現世に来てたんだよ」

「…はあ、まあいいけどよお……」

どうやら俺の正体はバレてないらしい。流石俺の認識障害！

「…さて、そろそろ俺も行く。お前は早く体に戻って、家族を連れて行け」

「ああ。そうだな。すまなかったな、感謝している」

「いいから早く行け」

俺はそう言うと、その場を離れていった。
ちなみに俺の体は、改造魂魄が入っているので既に家に戻っているはずだ。

……にしても思ってたより、大変だった。
早く帰って、寝よ。疲れたし……。

続く

第13話 The中学生（前書き）

久しぶりに更新したぜ！

なんか5月ぐらいから、やる気というものが抜けていった気がする。

たぶん作者は5月病ではなかったのだろうか……。

第13話 The中学生

side 雄希

「……ダリい」

季節は冬から春へと移り変わり、枯れきっていた木々からは新緑の芽がでて、春を待ち続けていた桜の蕾は花開き、冬眠から起きたであろう動物たちは既に動き始めていた。

そして四月初頭。

小学生は中学、中学生は高校へと新たな刺激を求め、若者達は心を躍らせていることだろう。

体育大会や学園祭、部活動や勉強など色々なイベントがある、こ

の青春を過ごす日々。

その中でも、青春の始まりを、そして新たな生活を告げる事になる入学式。

そんな入学式に、みんなのお兄さんこと、獅子堂雄希は出席していた。

入学式といえば、その学校にはいるための式と言うわけだが、正直することは無い。

ほとんど用事は新入生代表がするわけで、他の新入生は椅子に座って、預けられた猫のように大人しくしているしかない。

座っているにしても、校長の話や各代表の話など、しょーじき精神的に疲れてくる。

なんで校長って生き物は、あんなに話を長くしたがるのだろうか……。

聞いてても同じような話をダラダラ続けるだけだし、他にすることもない。

まあそんなワケで超絶的に暇なのだが……よし、寝よう。

俺は軽く認識障害の術を自分かけると、校長の長話の声を子守唄にしながら深い眠りへと入った。

入学式も無事終わり、現在は教室。
先程これからの学校での生活や、その他の事を説明していた担任
の姿はもう無い。

すでに時間は昼頃、今日は初日という事で午前で学校は終わりだ。教室を見回すと、もう何人かの生徒たちは帰っており、教室は少しガランとしている。

そういう事で俺も帰るとするか。俺は鞆を左肩に掛けると、教室を出て行った。

「雄希く〜ん。ちょっと待って〜」

教室を出て廊下を歩いていると、そんな声が俺の耳に入ってきた。俺は声が聞こえてきた方向、後ろを振り向いた。しかしそれを見た俺は戦慄した。

「私も一緒に帰るから、置いてかないで〜」

そんな声が聞こえてくるが、俺にはある部分しか目に入らなかった。

ある部分とは、胸。それは中一にしては大きく、マシユマロのように柔らかそうだった。

織姫が一步一步走るたびに、それはぶるんぶるんと揺れ、周りにいる男子どもの視線を釘付けにした。

ロリ巨乳というのはアレを指すのであろう。俺も少しある部分に血が集中し始めた。

「あれ？　なんで前屈みになってるの？」

「ははは、何でもねえよ…」

落ち着け息子よ！　ここは鋼鉄の精神で押さえ込めんだ！
俺はある程度息子が落ち着くと、織姫を連れ歩き出した。

「おなか痛いのか？」

「いや大丈夫。心配ご無用だ」

「それならいいけど…」

織姫は一応納得してくれたみたいだ。
まあ流石に元気な息子は見せられない。

「それより早く帰ろうぜ」

「うん！　わかった！」

元気だねえ、織姫は。

俺も息子が元気だよ、と冗談でも口で言えない事を考えている
と、前方から黒髪短髪、空手少女が歩いてきていた。

まあ竜貴なんですけどね。

「…ん？ 雄希？ あんたってこの中学に来てたの？」

「ああ。言ってなかったっか？」

「あんた、あんまり自分のこと話さないじゃない」

言ってなかったのか……言ってたと思ってたんだけどな。

「で、そっちの女の子は？ まさか……誘拐」

「いや、お前失礼なやつだな！？ ……小学からの友達だ」

こいつは俺の事をどう思っているのだろうか……。

しかし竜貴は織姫の方に視線を向けると、自己紹介を始めた。

「ふうん、私は有沢竜貴。雄希とは、まあ友達かな？」

「あ、私は井上織姫です！ よろしく！ 有沢…さん？」

「竜貴でいいよ。私も織姫って呼ばしてもらっし」

「うん！ たつきちゃん！」

うん、まあ仲がいいのはイイコトだと思うよ。

竜貴と織姫の出会いが早くなったのは、すこし予定外だが、まあ別に困ることでもないのでもいいだろう。

これで織姫に対するイジメもないと思うし、その関連で織姫兄の事故も無くなってくれと、俺は嬉しいことない。

だって織姫兄の事故って、織姫のイジメで切られた髪を見た織姫兄がヘヤピンを買ってきて、そのヘヤピンが無性に気にいらなかった織姫と兄がケンカしたから起こったみたいなもんだろ？

まああんまり関係ないかもしれないが、織姫兄も織姫とケンカしたことが気になって、周りに対する注意力が怠慢になってたんだろうし。それが事故に繋がったんだと、俺は思う。

「二人とも自己紹介も終わったことだし、早く帰ろうぜ」

「わかった！ いこ、たつきちゃん！」

「家の方向、違うと思うけどな。途中までなら一緒に帰れると思うよ」

織姫兄の監視はこれからも続けていくとして、とりあえず帰ろう。
俺は二人を連れて途中まで一緒に帰った。

——ちなみに周りの男達の殺意の籠った視線が、俺に刺さって
いた事をここに記しておこうと思う。

[illegible]

さて、現在は数カ月後に卒業式を迎えることになっている3年の夏。

え？ 前回入学式だったのに、展開が早すぎるって？ 一言、言おう……小説をなめるなっ！

……つーか、中学なんてたいした事ねーよ。

まあ出来事といえば、織姫兄の事故が起こらなかった事と、織姫のイジメがなかったことだな。

織姫兄のことは正直どうでもいいので放っておくとして、織姫のイジメのほうは、だいたい俺と竜貴が近くにいたので、起こることはなかった。

まあ近づいてきた女どもは竜貴が撃退するか、俺が（違う意味で）食うかだったな。

なかなか初々しくて可愛らしかったのが印象に残っている。

途中で女たちをいただいているのを、竜貴と織姫と見つかったボコボコにされたのは少しトラウマだ。

俺のほうが強いはずなのに、なぜか相手側の攻撃は俺の防御をすり抜けて全部当たった。

これがギャグ補正というやつなのだろうか、まったく恐ろしい物を味わってしまった。

ボコボコにされた後、竜貴と織姫がぼそぼそと小さい声で何か言っていたが、俺の耳では良く聞こえなかった。死神姿なら聞こえるけど、この義骸、改造されてないから一般人並の聴力しかない。

といっても普通の一般時よりは、全然能力は違うけどね。人間の限界は超えてないけど。

ちなみに少し聞こえてきた内容は「そん……つらとやる……わた……と……」とか、「……たしも……さきくと……って……たいなあ……」とか、断片過ぎてよくわからなかった。

そういえばこの前、織姫兄が現れて「織姫はやらんぞおー!!」とか言いながら殴りかかってきたな。

俺に殴りかかる瞬間、一瞬のあいだに現れた織姫が兄に殴りかかって路地裏に引きずって行った。

その後何かが殴られるような音とか、男の悲鳴とか聞こえたり、

路地裏で何があつたかわからないけど、俺は気にしないことにした。

ただ音がやんだ後に、謝りにきた織姫の拳に血がこびりついていたのは、忘れることが出来ない。後ろにいた原型の留めていない織姫兄の顔も。

閑話休題

と、色んな事もあつたが、今日は実は海に来ていたりする。

メンバーは俺、織姫、竜貴、何時の間にかいた千鶴、その付属で国枝、小川みちる、俺が誘った一護に、チャド。

中々なメンバーだろう。まあ一護、チャドは不良なので、小川みちるにびびられていたが。

「——にしても暑い……」

「それを言うな、雄希。余計に暑くなる」

「うるせえ、一護。暑いもんは、暑い」

ああ……早く女子達は着替え終わらないのだろうか。
女子って何するにしても遅すぎる。

「まあ一護も、あんたもジュースでも飲んでおけ。熱中症になるぞ」

「おお、すまん。それと俺のことは雄希でいい」

「そうか、俺の事も好きに呼んでくれ」

「じゃあ、チャドで」

「……そうか」

不満か、チャド。でも悪いのは、読み間違えた一護にいえ。

俺は何も悪くない。といっても誰でもチャドって言いそうだけだな。

「まさきく——ん！！ おまたせ——！！」

俺たちが話している間に、着替えも終わったのだろう。

織姫を先頭に、女子達がこちらに向かってきていた。

……しかし、織姫。そんなに走るんじゃない。メロンが零れ落ちそうだぞ。

「織姫！ あんまり走るとこけるよ！」

竜貴もなんか織姫の母親みたいだな。

まあ織姫、精神年齢低そうだし？ いいと思うけどね。

「ああ……織姫ったらあんなにはしゃいで……食べちゃいたい……」

「なに言っただか……」

「あうう……あの人たち怖すぎるよお……」

千鶴は興奮しすぎだろ。食べちゃいたって……流石に引くわあ。

国枝はクールすぎるわ。つか、本は置いていけよ。
というか小川、お前は怖がりすぎ。

「こらあ、千鶴！ あんたは織姫に近づくなあ！」

「うつさいわね、竜貴！ あんたには関係ないわ！」

落ち着けや、テメエら。殴り合いに発展しそうになるなよ。
というかお前から会ってそんなに経ってないのに、ケンカとかどん
だけ仲いいんだよ。

「はいはい、ケンカはいいから早く遊ぼうぜ」

「たつきちゃん、はやくくく！」

こらこら織姫、ジャンプするな。魅惑の果実が揺れてるぞ。
周りの男どもの視線が危ないから、そろそろ止まってくれ。

「やっぱ、あちーな…」

「そうだな……」

お前らもなにくつろいでんだよ。
中学生だったら、もうちょっとはしゃげよ。

こうして俺の、中学最後の夏休みは過ぎていった。

続く

第14話 原作開始（前書き）

つ、疲れた。

とりあえず更新したけど、ちゃんと出来ているかは良くわかりません。

まあ結構長くなったと思うので、よろしく！

第14話 原作開始

ここは尸魂界、穿界門前。

そこには十三番隊隊長である浮竹、同隊副隊長の海燕。

そして本来のBLEACHヒロインである少女——ルキアの姿があつた。

ちなみにルキアのフルネームは“獅子道”ルキア。

一応、雄希の養子として登録されているので、ルキアは朽木としてではなく、“獅子道”の名を授けてもらっていた。

雄希が獅子道の名を授けたとき、頬を赤く染めながら嬉しそうな笑顔をしたルキアの顔は、雄希の心に“萌え”という言葉を刻み込んだ。

実際、雄希はその時、吐血しながらも笑顔で散っていった。

まあそれを見たルキアは焦りまくっていたらしいが……。

ちなみにルキアの姉である緋真に名を授けたときも、ほとんど同じことが繰り返された。

「わざわざ来ていただなくとも……」

ルキアは自分の上司である浮竹や海燕に、わざわざ来てもらって少し申し訳なかった。

その様子を見て海燕は、少し呆れたように言った。

「お前は気難しく考えすぎなんだよ。そんな事気にすることじゃないだろ？」

「そうだな。せつかくの現世だから、楽しんでくるといい」

海燕の言葉に浮竹の言葉が続く。

「しかし、任務がありますし……」

「お前はかてえ奴だな……まあいい。とにかく精一杯、頑張ってこい！」

「お前の無事を祈っているぞ、獅子道」

「はい！」

励ましをもらったルキアは地獄蝶先導のもと、穿界門のほうへと近づいていく。

ルキアは穿界門の一步手前までやってくると、後ろを振り返って言った。

「——では、行ってまいります」

ルキアはそういつと穿界門を潜りぬけた。

[illegible]

やあ、みんな！ 元気かい？
世界のお兄さん、獅子道雄希だよ！ 僕は今日も元気ハツラツさあ！！

……ふう、この流れも少し疲れたな。もっと面白いやつがあればいいんだけど……。

まあとりあえず今の現状を話すことにしようか。え？ 聞きたくない？ ……残念、拒否権はない。

冗談はさておき、あの後中学最後の体育大会や、その他ほかの学校行事も無事終えた俺達は、新緑を迎える前の三月に卒業式を終えた。別に俺的には感動も糞もなかったが、織姫は正直めんどくさくなる位泣いていた。竜貴はそれを見て苦笑いをしていた。アレを見れば、誰でも自然と苦笑いになる。

と、まあ行事も色々あったわけだが、休みの日にはけっこう遊んでいた。

さすがに土日には時々しか遊ばんが、冬休みにはスキーやスノーボードなど、皆で集まって遊びまくっていた。織姫はドジッ娘と思われがちだが、実際は運動神経がよくスキーでもスノーボードもお茶の子さいさいだった。

竜貴は勿論、陸上部に所属する国枝も運動神経は高い方だ。ちびっコの小川は見た目どおりの運動音痴、問題の千鶴は、基本的に運動は得意ではないが、エロ
が絡むと人間離れた身体能力を発揮する（らしい）。

一護、チャドは、まあいい方だと思うよ？ ただ一護は細かいことが苦手だろうね。あいつ絶対、手先不器用だと思うし。チャドは知らん。

話を戻そう。

それから皆で空座第一高等学校に受験することにして、アホは勉強、頭が良いやつはそれらの補助、ってな感じだった。まあみんな結構頭は悪くなかったけどね。

受験が終わった後は、結果が発表されるまで遊んだりして、暇を潰していた。

結果はもちろん全員合格だが、合格発表日、騒がしいアホ面の男と、可愛い系の男の子が合格発表の掲示板の前でごちゃごちゃしていると、その瞬間、オレンジ頭の男と大男の二人組みが掲示板を蹴り破っていた。

原作にもあったなあ、とか思いながら見学していた。俺に損害がなければ、正直、浅野啓吾がどうなるうかと知ったこっちゃんない。逆にギャグ的には面白いのもっとやって欲しい。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

てな感じで入学式。

中学の時同様、校長の話が長いので、俺は始まった瞬間即睡眠。
ばれない様、自分に認識阻害の術を掛けているので、俺の睡眠が
妨げられることはない。

そして教室。

クラスは一護たちと同じクラスで、俺が一番後ろの席だった。原作メンバー達は、各自少し緊張感を持ちながらも、初めての人とのコミュニケーションを楽しんでいる。ちなみにこのクラスの女子は、皆レベルが高い。

しばらくすると前の扉がガラツと開き、担任であろう教師が入ってきた。

教師は教卓まで歩いてくると、手に持っている物をバンツと置く。

「よ——し、全員席に座ってるな。私がこのクラスを担当する越智美諭だ！」

見た感じまだまだ若めの女教師。チャームポイントはメガネ。ただし胸がない。

でも結構優しく、放任主義なので俺的には、チョーいい先生である。

「この一年間、色々あると思うがよろしく——と、まあベタな感じの話は終わって……」

いや、ベタでいいよ。

「とりあえず私は放任主義だから、あんまり注意もないのでよろしく。まあ高校生は警察にお世話にならない程度にヤンチャしとくぐらいがいいと思うよ」

「（教師の言うセリフじゃねエ——ツ！！）」

正直わからないが、先ほどクラスの心が一つになったと、俺は思った。

[illegible]

それから二ヶ月が経った頃、空座町の南方に久しい霊圧を感じた。

時刻は午前二時二十三分、週末である金曜日のことだった。

寝ていたら突然霊圧を感じたので、一応確認してみるとルキアだった。

もうそんな時期なんだ——とか思いつつも、正直心配でならない。だって我が義妹には、これからいろんな困難が待ち受けてるんだぜ？ そりゃあ義兄としては心配するでしょうに……。

まあ俺がちよいちよい助けていこうと思うので、ルキアのことには任せてほしい。

といつても、死なない程度には戦わせるつもりだ。可愛い子には旅させよ、的な？

いろいろ思うところもあるが、とりあえず朝になれば学校に行かなければならないので、今回は寝ようと思う。睡眠は大事だよね……
zzz……zzz。

……

.....

.....

.....

.....

.....

そして学校も終わり、一度家に戻った俺は、現在、黒崎家上空にいた。

ちなみに平子みたく逆さにはなっていない。普通に立っている。

とまあ、くだらない事はさておき、先ほどルキアが一護の部屋に通り抜けていったので、今ごろ一護VSルキアの戦いが繰り広げられているはずだ。

たぶん一護はルキアの絵の才能に、驚いている頃だろうな。まあ顔に髭の落書きとか、ルキアお茶目すぎるケド…。

「つーか何故ルキアは、あの黒崎家の前にいる虚に気づかなかったのかねえ……」。

「そういえば一護の霊圧が高すぎて、感覚が阻害されたみたいなのと言ってたような」。

「というかあんなに負けるほどルキア弱くはないと思うんだけど、まあ多分一護を守ろうと必死だったんだろう。席官クラスはあるから普通負けないし」。

「一心も一心で何やってんだよ。あれか、一護に死神としての能力を覚醒させる為の布石ってことか？」

「まあ流石に妻、娘二人が死にそうになったら助けると思うけど」。

「一護は助けないだろうけどな」。

と色々考えていたら、いつのまにか一護が死神化していた。

「斬魄刀デケー……もっと、ぎゅっと凝縮させないと、そんなんじや脆すぎて壊れちゃうぞ？」

「まああいつ霊力のコントロール下手っばいし？　しょーがないか。この辺の虚ぐらいだったら、あの斬魄刀でも十分戦えるでしょ…」

…。

あ、足切られた。虚マジ、弱えー…。

まあ雑魚のフィッシュボーンDだし？　しゃーないっちゃ、しゃーないか。

死神なりたての一護にだって倒されるような虚とか、チヨー弱え…。

いつも思うけど、主人公って倒すとき、なにか叫ばないといけないルールでもあるのか？

わざわざ叫ばんでもシュパッと倒した方が効率いいと思うんだけど……といっても俺もケツコー叫んだりするんだけどね？

あれってやってみるとやる気とか、なんか気合的なもんがでるか、一応は役に立ってるよね――。

ま、そんなことはどうでもいいし、虚も無事倒されたから俺は家に帰るとするか。

と俺が家に帰ろうとする前に、背後から怪しい人影が！！？

「なに言ってるんすか、雄希サン…」

「地の文に突っ込むなよ、喜助」

「これが紅姫の能力『地読み』！…」

「馬鹿か、お前は……」

「ヒ、ヒドイッ!？」

まあ「冗談はここまでにして……

「……で、何の用だ。」

「雄希サンに頼みごとがあつてやつてきました」

「頼みごと? ……いくら頼もつが俺の家宝『ジャンボ巨乳大王』はやらんぞ」

「そんなもんいりませんよ——…持ってますから」

「まさかの持ってた!？」

いやいや、まさか持つてるとは驚きだよ、ワトソン君。
冗談で言ったのに、まさかの新事実!世界が騒然……。
いや、俺の家宝ではあるけど? まだまだ持つてるけど。

「それはさておき、要件は一つ――…あなたの義妹サンについてです」

「……崩玉か」

「おっと、さすが雄希サン………全とお見通しっスか」

「…何となくだよ」

普段おちゃらけてる喜助だが、いまはシリアスなムードを醸し出しながら真剣な顔で語っている。

もちろん俺も今回はさすがに真剣だ。なんたって義妹のことだしな。

「まあ説明はいらないかもしれませんが、簡単に説明します」

その後、簡単に説明してもらった事を纏めると、

・制御できない崩玉を、藍染の手から逃したい。

・何処に隠そう……そうだ、魂魄の中に隠しちゃおうぜ！

・いいところに死神の女が、フヒヒ。

・あれ、獅子道サン家の義妹じゃねえか！？

・許可もらわねえと、殺される！ 早速行かなきゃ……。

「いや、そんなに汚く言っちゃーないんすけど……」

「面白おかしくいくのが、俺だ」

実際フヒヒとか言ってたら、普通にぶっ飛ばすわ。本気で。

「死ぬことは無いんだろうな？」

「はい。その辺のところはちゃんと確認してるっス」

「そうか……まあ俺としちゃあ、あんま危険な事はさせたくない

が……いいだろう」

ここで断ると藍染が何するかわからんし、原作を離れ過ぎると何が起こるかわからん。

つつても既にけっこう手遅れだと思うが、その辺は気にせんでくれ。

「そっすか…とりあえず今から会ってくるんで、いずれまた会いましょう。雄希サン」

「ああ。くれぐれも命だけは危険にさらすなよ」

「了解っス」

喜助はそう言つと空中から飛び降り、どんどん小さくなっていった。

ま、とりあえず命だけは助けられないとな。命といわず、傷が残りそうだったら、直ぐに助けに行くけどな。流石に女の子の肌に傷は残せんよ。

俺は一度ルキアがいるところを確認すると、屋敷の方へと帰っていった。

続く

第14話 原作開始（後書き）

感想、アドバイス、その他に何かあればどうぞよろしく。

第15話 転入生（前書き）

とりあえず投稿。

パソコン？ 直りませんでした、なにか？
結局、親のパソコンを借りてます。

つーことで、どうぞ。

第15話 転入生

「は——っ」

ぼへ————

そんな音が聞こえるんじゃないかと思うぐらい織姫はボ——っ
としている。

さてここは空座第一高等学校の某教室。

昨日の騒ぎの後は特に問題なく、自室のベットにて眠りにつかせ
てもらった。

いまはいつもどおり登校してきて二限目の休み時間、自分の席か
ら織姫の様子を見ているだけ…。

なにを考えているかは昔から予測不可能で、現在脳内では“織姫
ワールド”が繰り広げられていることだろう。

そういえば登校する途中に一護の家を見たが、予想通りおつきな穴があいていた。

記憶置換しているとはいえ、流石にトラックはないだろうと思っ
たが、まあそれでうまく誤魔化せているならいいか、と特になにも
しなかった。

「こらぁ口あいてるぞ！ いい若いモンがまた昼間からボ——ッ
として！」

「たつきちゃん」

と俺がいろいろ考えていると、織姫の様子にさすがに見かねたか、
竜貴が注意をしていた。

「遅いね一護！」

「え？」

「一護のこと考えてたんでしょ？」

「ち…ちがうよ！（ちらちら）」

そついいながらこちらを見るな、織姫。

「なんだ違うのか…（ちらちら）」

そして何故おまえも見る、竜貴よ。

「今日休みかもしれないよ、一護」

すると織姫、竜貴に三限目の準備をしていた水色が話し掛けてきた。

「小島くん」

「どういうこと？　そついや小島、いつも一護といっしょに来てるよね」

「うん。今朝も寄ったんだけど家にでっかい穴があいててさ。なんか夜中にトラックに突っ込まれたって言ってた」

水色は両腕を広げ、穴の大きさを表しながら、織姫たちに説明している。

「トラックウ！？　じゃあ何？　あいつケガしたの！？　それとも死ん——…」

「——でねえよ」

竜貴は驚いて、危ない事まで言いそうになったが、それはオレンジ頭の不良によって止められた。
勝手に死なせる竜貴も酷いが、頭をかばんで度突く一護もけっこう酷い。

「うちの連中は全員無キズだ。残念だったな」

「ちっ」

「聞こえてるぞ、雄希」

「故意だからな」

「うぜえ……」

だって一護苛めるの楽しいし？　つか誰弄っても楽しいけど。

「来たんだね。家の修理手伝ってたの？」

「まあな、三限は？」

「現国」

「越智サンか。まーあの人ならゴチャゴチャ聞いてこねーだろ」

一護は席に座ろうとしながら、水色と会話している。
「というか俺は一護が横の女子に気付かないことが不思議でなら
ない。」

「貴様……あなたが黒崎くん？」

「がつつり間違っただな…。」

「よろしく！（キラーン）」

——だらだらだらだら……

「あ、彼女、今日から来た転入生の獅子道さん。こんなハンパな時期だけど、家庭の事情で急遽引っ越したらしくて……。それにしても獅子道っていうからびっくりしたよ。あの獅子道グループのお姫様かと思ったけど、苗字が一緒なだけなんだって。めずらしいよね」

「て……ッてめえ、なんで……」

「？　どうしたの？」

水色がいろいろ説明しているが、一護はほとんど耳に入っていない様子。

まあ仕方があるまい。なんせ昨日会った死神が、学校に転入生として存在していればな。

「黒崎くん、私まだ教科書とかないの。貴さ……あなたのをいっしょに見せてもらってもいいかしら？」

そう言いながら手を出すルキアの手の平を見て、一護はドハーツとか言いそうな顔で驚いている。

ので、まあ、することはない。

「一護と獅子道さん、どうしたんだろっ?」

「まさか、もうそんな関係に!?!」

「馬鹿言ってんじゃないよ…」

水色もケイゴも気になるようだが、想像してるような関係じゃないから、安心しとけ。つーかルキアの彼氏になるとか、俺を倒すぐらいじゃないと許すはずがない(↑馬鹿)

「まあ気にすんな。次の授業の準備でもしてろ」

「はあ、わかったよ。つーか、つぎ英語かよ……宿題やってねえ…(ちらっ)」

「さ、水色。教室、移動しようぜー」

「そっだね」

「無視すんなよ——っ!!」

うるせえ。やってないやつが悪い。

「行くぞ」

その後、校舎裏で倒れている一護が見つかった。

助けなかったのかって？ 魂のない一護の体をもつてどうすればいいわけよ……。

まあ見つからないように術を使えばいいわけだけど、結局メンドくさいだけ（笑）

説明終わり！ つーことで授業あるから、じゃあね——っ!!

続く

第15話 転入生（後書き）

なんか微妙な気がする。

ちよつと短いかな、とか思いつつまあ許してね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1099s/>

古代の死神

2011年9月20日22時58分発行